



第
464
集

青森県埋蔵文化財調査報告書 第464集

倉越(2)遺跡Ⅲ・太田(2)遺跡

倉越(2)遺跡Ⅲ 太田(2)遺跡

—国道4号七戸バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

一〇〇九・三

青森県教育委員会

2009年3月

青森県教育委員会

倉越(2)遺跡Ⅲ 太田(2)遺跡

—国道4号七戸バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2009年3月

青森県教育委員会

序

七戸川とその支流の周辺には数多くの遺跡や史跡が残されています。青森県埋蔵文化財調査センターでは、この地域に計画された国道4号七戸バイパス建設事業に伴って、平成15年度から事業予定地内の発掘調査を進めてきました。平成19年度には七戸町太田(2)遺跡の発掘調査、平成19・20年度は七戸町倉越(2)遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、太田(2)遺跡では、弥生時代を主体とする遺物が出土し、また、倉越(2)遺跡からは平安時代の遺物が出土し、竪穴住居跡や土坑など古代の集落の一部を検出しました。これらは、今後の集落遺跡の研究等において、貴重な資料となり得るものです。

本報告書は、これらの調査成果をまとめたものです。この成果が今後、青森県の埋蔵文化財の保護と研究に活用され、地域社会の歴史・文化への普及活動に資することを期待します。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、御指導、御協力を賜りました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成21年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 伊藤博文

例　　言

- 1 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが平成19・20年度実施した国道4号七戸バイパス建設事業に伴う倉越(2)遺跡及び太田(2)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 倉越(2)遺跡の所在地は、上北郡七戸町字倉越地内、太田(2)遺跡の所在地は、上北郡七戸町字太田地内である。青森県遺跡番号は、倉越(2)遺跡が41064、太田(2)遺跡が41089である。
- 3 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は、青森県埋蔵文化財調査センター 工藤次長、成田副事務、大平文化財保護主査が分担し、執筆者名は各項目末に記した。依頼原稿の執筆者名は文頭に記した。
- 4 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した国土交通省東北地方整備局 青森河川国道事務所が負担した。
- 5 出土資料の鑑定及び分析については以下の諸氏・機関に依頼・委託した。(敬称略)
石器の石質鑑定　　青森県立郷土館学芸員　島口　天
放射性炭素年代測定　株式会社　加速器分析研究所
遺物の写真撮影はシルバーフォトに委託した。
- 6 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、遺物写真の縮尺は統一していない。
- 7 土層等の色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄 1996)を使用した。
- 8 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1「七戸」の地形図を複製したものである。
- 9 図中で用いたスクリーントーンの指示内容は、以下のとおりである。



焼土範囲
(遺構)



スリ範囲
(石器)



タタキ範囲
(石器)



溶着物
(土製品)

- 10 引用・参考文献については巻末に収めた。文中に引用した文献名については著者名と西暦年で示した。
- 11 発掘調査及び本報告書作成における出土品・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 12 発掘調査及び本報告書作成にあたり、次の機関並びに諸氏からご教示、ご指導を頂いた。(アイウエオ順、敬称略)
一町田工・岩井浩介・大久保学・小山彦逸・児玉大成・工藤清泰・笹森一郎・佐藤智雄・佐野忠史・神昌樹・神康夫・嶋影莊憲・滝本学・瀬川滋・田中寿明・長尾正義・中嶋友文・長尾正義・福田友之・古屋敷則雄・村木淳

目 次

序

例言

目 次

第1編 序説	1
第1章 調査概要	3
第1節 調査に至る経過	3
第2節 調査要項	3
第3節 調査方法と整理方法	5
1. 調査方法 2. 整理方法	
第4節 調査経過	6
1. 平成19年度調査 2. 平成20年度調査	
第2章 遺跡周辺の地形と地質	7
第2編 倉越(2)遺跡III	9
第1章 基本層序と地形	11
第2章 検出遺構と出土遺物	12
第1節 検出遺構と出土遺物	12
1. 壁穴住居跡 2. 土坑 3. 溝状土坑 4. 溝跡 5. ピット・ピット群	
第2節 遺構外出土遺物	38
1. 縄文土器 2. 石器 3. 古代から近世の遺物	
第3章 まとめ	40
第3編 太田(2)遺跡	41
第1章 基本層序と地形	43
第2章 検出遺構と出土遺物	43
第1節 検出遺構と出土遺物	43
1. 土坑 2. 溝状土坑 3. 溝跡 4. ピット群	
第2節 遺構外出土遺物	53
1. 土器 2. 石器	
第3章 まとめ	56
遺物観察表	57
第4編 自然科学分析	59
第1章 放射性炭素年代測定	60
写真図版	65
抄録	83

挿図目次

図1 遺跡位置図	2	図29 第4号溝状土坑	51
図2 地形分類図	8	図30 第1号溝跡	52
倉越(2)遺跡			
図3 遺構配置図	10	図31 ピット群	54
図4 基本層序	11	図32 遺構外出土遺物	55
図5 第24号竪穴住居跡	12		
図6 第33号竪穴住居跡	13		
図7 第34号竪穴住居跡	15		
図8 第35号竪穴住居跡(1)	17		
図9 第35号竪穴住居跡(2)	18		
図10 第35号竪穴住居跡(3)	19		
図11 第36号竪穴住居跡(1)	20		
図12 第36号竪穴住居跡(2)	21		
図13 第37号竪穴住居跡	22		
図14 第38号竪穴住居跡(1)	24		
図15 第38号竪穴住居跡(2)	25		
図16 土坑(1)	32		
図17 土坑(2)	33		
図18 土坑(3)	34		
図19 溝状土坑	35		
図20 溝跡・ピット群	37		
図21 遺構外出土遺物	39		
太田(2)遺跡			
図22 遺構配置図	42	写真15 遺跡遠景・土坑(1)	80
図23 基本層序	43	写真16 土坑(2)・溝状土坑・溝跡・ピッ	
図24 土坑(1)	47	ト群	81
図25 土坑(2)	48	写真17 出土遺物	82
図26 第1号溝状土坑	49		
図27 第2号溝状土坑	49		
図28 第3号溝状土坑	50		

写真目次

倉越(2)遺跡

写真1 調査全景・調査風景	66
写真2 遺跡遠景・調査風景	67
写真3 竪穴住居跡(1)	68
写真4 竪穴住居跡(2)	69
写真5 竪穴住居跡(3)	70
写真6 土坑(1)	71
写真7 土坑(2)	72
写真8 土坑(3)・溝状土坑	73
写真9 溝跡・ピット群(1)	74
写真10 ピット群(2)	75
写真11 竪穴住居跡出土遺物(1)	76
写真12 竪穴住居跡出土遺物(2)	77
写真13 竪穴住居跡(3)・土坑・ピット群・ 遺構外出土遺物(1)	78
写真14 遺構外出土遺物(2)	79

太田(2)遺跡

写真15 遺跡遠景・土坑(1)	80
写真16 土坑(2)・溝状土坑・溝跡・ピッ ト群	81
写真17 出土遺物	82

第1編 序 説

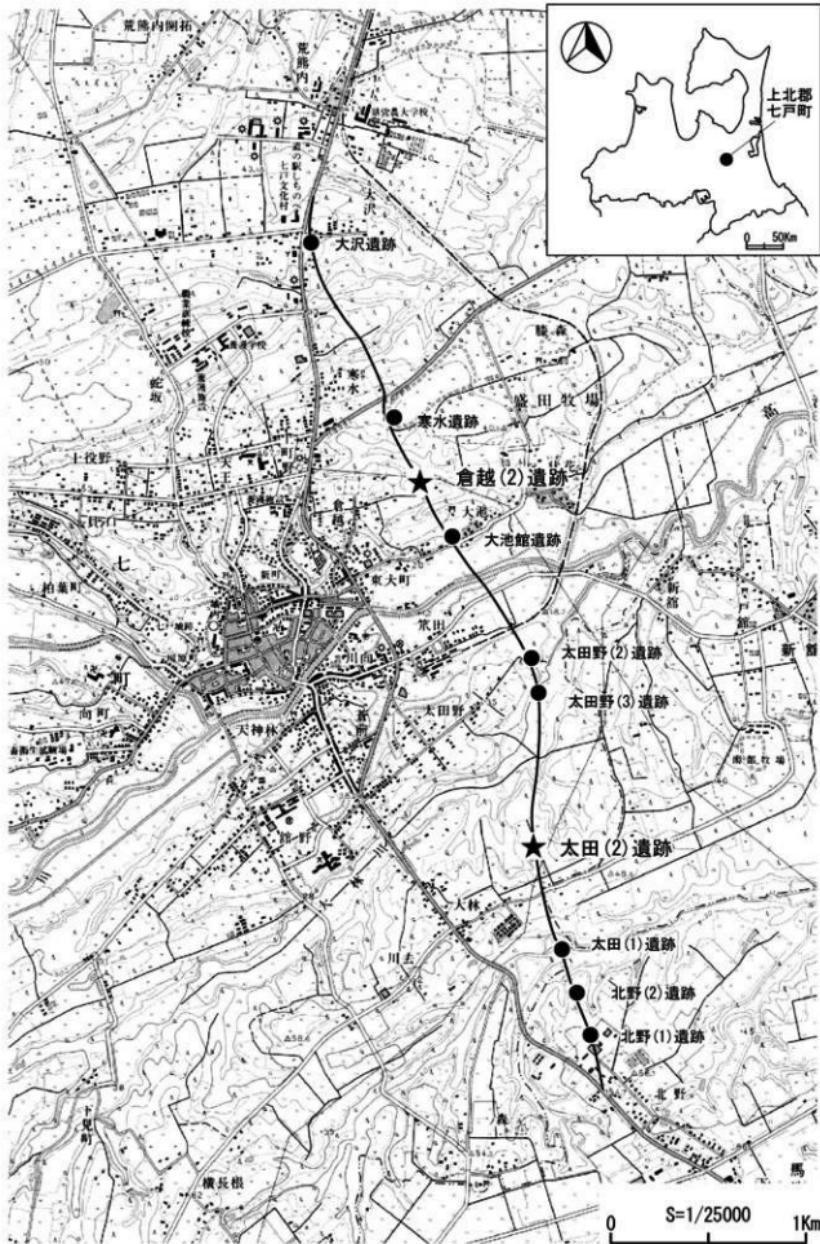


図1 遺跡位置図

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経過

国道4号七戸バイパスは、十和田市と七戸町を結ぶ延長5.7km、幅員28.0m（暫定14.5m）のバイパス道路である。七戸町内の交通混雑や険路区間の解消、冬期の安全の確保、沿道環境の改善を目的に計画され、平成元年に事業着手、平成7年度に終点部の交差点改良に着手されている。

この建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いをめぐって、県教育庁文化財保護課・国土交通省青森河川国道事務所・七戸町の三者間での協議により平成15年度から青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなった。青森県埋蔵文化財調査センターではこれを受けて、平成15年度に倉越（2）遺跡・大池館遺跡の2遺跡、平成16年度には大沢遺跡・寒水遺跡・倉越（2）遺跡（継続）・大池館遺跡（継続）の4遺跡、平成17年度には大池館遺跡（継続）及び、高瀬川南岸の太田野（2）遺跡・太田野（3）遺跡の3遺跡調査を実施した。

本報告書は平成19年度及び20年度に実施された倉越（2）遺跡（継続）、平成19年度に実施した太田（2）遺跡の調査成果を掲載したものである。

なお、倉越（2）遺跡及び太田（2）遺跡に係る土木工事等のための発掘に関する通知は、平成19年6月に青森河川国道事務所長名で提出され、同年7月に県教育庁文化財保護課が当該発掘前における埋蔵文化財の記録の作成を目的とする発掘調査の実施が指示された。また、平成20年度の倉越（2）遺跡の追加工事に係る土木工事等のための発掘に関する通知は、平成20年7月に提出され同年8月に埋蔵文化財の記録の作成を目的とする発掘調査の実施が指示された。

第2節 調査要項

1 調査目的

国道4号バイパス建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する倉越（2）遺跡及び太田（2）遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間

（平成19年度）

平成19年7月17日～同年10月12日（倉越（2）遺跡、太田（2）遺跡）

（平成20年度）

平成20年9月2日～同年9月12日（倉越（2）遺跡）

3 遺跡名及び所在地

倉越（2）遺跡（青森県遺跡番号41064）

上北郡七戸町字倉越地内

太田（2）遺跡（青森県遺跡番号41089）

上北郡七戸町字太田地内

4 調査面積

(平成19年度)

倉越(2)遺跡 1,300 平方メートル

太田(2)遺跡 2,800 平方メートル

(平成20年度)

倉越(2)遺跡 50 平方メートル

5 調査委託者

国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

(平成19年度)

調査指導員 村越 潔 国立大学法人 弘前大学名誉教授（考古学）

調査員 高島 成侑 前八戸工業大学教授（建築学）

佐々木 辰雄 青森県立八戸中央高等学校教諭（地質学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 末永 五郎（平成20年3月 退職）

次長 三宅 徹也（平成20年3月 退職）

総務G L 櫻庭 孝雄

調査第二G L 工藤 大（現 次長）

副参事 成田 澄彦

文化財保護主査 佐藤 真弓

文化財保護主査 大平 哲世

調査補助員 小幡 育恵（平成20年3月 退職）・梅田 裕哉

大室 なつ美（平成19年9月 退職）・工藤 敏大

(平成20年度)

調査指導員 村越 潔 国立大学法人 弘前大学名誉教授（考古学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 伊藤 博文

次長 工藤 大

総務G L 櫻庭 孝雄

副参事 成田 澄彦

第3節 調査方法と整理方法

1 調査方法

調査は、グリッド法を基本とした分層発掘を行った。

倉越(2)遺跡のグリッドの設定は平成15年度の倉越(2)遺跡で使用したグリッドを継続して使用した。すなわち、国土交通省公示の平面直角座標第X系（旧日本測地系）のX=77,400、Y=27,500を原点 I A-0とし、X軸は北方向を正として、Y軸方向は東方向を正として4m毎のグリッドを設定した。X軸はローマ数字（I～）とアルファベット（A～Y）の組み合わせで正方向に I A・I B・…・I Y・II A・II B・…と呼称し、Y軸は正方向にアラビア数字で1・2・3・…と呼称した。これによるグリッドの呼称はグリッドの南北隅をグリッド名として用い軸線、V E-170のように呼称している。

太田(2)遺跡のグリッドは、国土交通省公示の平面直角座標第X系（旧日本測地系）のX=76,360、Y=28,360を原点 D A-80とし、X軸は北方向を正として、Y軸方向は東方向を正として4m毎のグリッドを設定した。X軸はアルファベット（A～Y）の組み合わせで正方向に D A・D B・…と呼称し、Y軸は正方向にアラビア数字で1・2・3・…と呼称した。グリッドの呼称は南北隅をグリッド名として用い、D E-100のように呼称している。

ベンチマークは基準点から遺構精査の必要に応じて移動した。

土層の掘削は、表土については調査担当者立会いのもと、重機を用いて除去した。遺構は堆積状況を把握するために、規模や必要に応じて適宜二分法・四分法を用い、土層観察用ベルトを残しながら行った。土層の名称は、基本層序については上位から下位にローマ数字を、遺構の堆積土については上位から下位に算用数字を付した。土層注記には『新版標準土色帖』を用いた。

実測図の作成は、平面図は株式会社Cubic「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で行った。図面の縮尺は1／20を基本とし、炉などは必要に応じて1／10でも作成している。

遺構の呼称はその性格により竪穴住居：SI、土坑：SK、溝状土坑：SV、溝跡：SDの略号を用いた。原則的に検出順に命名したが、調査の進展により一部に欠番がある。

遺物の取り上げは、遺構及びグリッド毎に層位毎で取り上げて、必要に応じて出土地点の図化及び標高を記した。なお、遺構内のもので出土層位が不明なものは、覆土一括で取り上げを行った。

写真撮影は、35mmカメラでモノクロ及びリバーサルで撮影したほか、デジタルカメラも使用した。

2 整理方法

平成19年度に発掘調査した倉越(2)遺跡及び太田(2)遺跡の遺物の整理作業については、平成20年3月までに水洗い・乾燥・注記を行った。4月からは接合・復元を行った。5月からは土器の石膏入れ・土器の選別を行い、7月には土器の選別、8月には拓本をとり、9月には土器の断面実測を行った。石器については9月に選別を行い、10月に実測、11月に石質鑑定を行った。また、土器及び石器のトレース作業は10月以降、順次行った。

遺構については発掘調査終了後に室内でデジタルトレースを行い、平成20年12月中に多くの遺構図面をデジタル化した。遺構図面の修正には株式会社Cubicの「遺構実測支援システム」を使用した。

平成20年度に発掘調査した遺物の整理については、平成20年10月に水洗い・乾燥・注記を行った。11月からは接合・復元及び石膏入れ、土器の選別作業を行い、その後に土器実測作業を行い、トレー

ス作業は12月に終了した。

遺構については、平成19年度の遺構と同様にデジタルトレースを行い、デジタル化した。

第4節 調査経過

1 平成19年度調査

当初の発掘調査期間は平成19年8月1日から同年10月31日までの予定であったが、工事を急いでいる事業者側からの要望で、予定を早めて7月17日から発掘調査を開始することになった。調査の開始に先立って、調査対象区域のうちバイパス本線部分約600m²の表土剥ぎを重機で行ってから、7月16日に発掘器材等を現地に搬入した。バイパス本線部分の粗掘り作業は7月中旬に全面終了し、古代の堅穴住居跡2軒と土坑9基、溝状土坑1基等の遺構を検出した。検出遺構については平面形等を確認次第精査に入り、遺構の精査作業と併せて地形図を作成し、8月3日にはバイパス本線部分の調査を終了した。取付道路部分約700m²の調査は7月末から開始したが、立木の伐採作業が遅れていたため、全面発掘に先立って試掘作業を実施した。

8月中旬から調査区西側の表土除去及び遺構精査を並行して行った。7月から8月にかけて行った先行試掘では表土が厚いところが確認されていたため、8月下旬に重機による表土処理を行った。遺構精査は順調に進んだものの、南北に横切る谷が2本存在し、底部からの湧水が多く、その部分の遺構検出作業は難航した。9月21日に調査を終了し、プレハブを撤去した。

太田(2)遺跡では、8月29日から重機による表土処理を開始した。倉越(2)遺跡の調査と並行して行うこととし、9月4日から機材と人員を振り分けて遺構検出作業を開始した。調査区北側は立ち木の伐採による切り株が多く、検出には時間がかかったが、順次遺構精査を行った。天候にも恵まれ、調査は順調に進み、10月12日には機材・遺物等を撤収し、全調査を終了した。

2 平成20年度調査

平成20年9月2日に調査を開始した。調査区は平成16年度に調査を行った地区の隣接地であり、畠地に向かう付け替え道路部分50m²である。

平成16年度の調査で検出した第24・33号堅穴住居跡が調査区にかかる事が予想されていた。作業は天候に恵まれ順調に進み、第24・33号堅穴住居跡の東側部分を確認し、さらに東側を精査したところ新たな住居跡を検出し第38号堅穴住居跡とした。

調査の結果、今回の調査区では3軒の平安時代の住居跡を確認した。

9月12日に全ての調査を終了して調査委託者に引き渡し、発掘調査を完了した。

第2章 遺跡周辺の地形と地質

本遺跡周辺の地形については、青森県教育委員会から既刊（佐々木2005, 同2006）の佐々木辰雄調査員による論述が詳しいため、ここではそれらを参考にして概略を記す。

奥羽脊梁山脈の北端にあたる八甲田山系、その東には三本木原台地とよばれる広大な台地が太平洋まで広がっている。この地域の台地には海成・河成段丘が発達しており、高位のものより高位面、七百面、天狗岱面、高館面、根城面、柴山面、七戸面、三本木面などに分けられている。

倉越（2）遺跡は、七戸町の市街地から北東に数百mの台地縁辺部にある。また、太田（2）遺跡は、市街地から南東に約1kmの台地の上にある。三本木原台地の全体からすると、それらは中央西端部にあたり、山地との境目に近い場所となる。

また、西にそびえる八幡岳に源を発した作田川と和田川は合流して七戸川となり、さらに坪川や赤川を集めて小川原湖へ注いでいる。作田川と和田川の合流点付近における谷底平野には七戸町の市街地が広がる。この谷底平野は南北幅は約1kmと狭く、北にも南にも急崖で台地と接しており、その高低差は約20m前後である。

遺跡のある台地は、その堆積物が砂礫や、軽石流堆積物の二次堆積であることから、河成の扇状地堆積による三本木面に相当するとされる。（水野・堀田, 1990）この周辺での三本木面での標高は、西部の山地との境付近で70～80mであり、作田川と倉岡川とに挟まれた奥羽種畜牧場のあたりではほとんど平坦な地形となっている。それでも東部に徐々に標高を下げ、末端部で30～40mとなり、海成段丘の高館面へと移行している。通常は地形的に高位の段丘面が古いのであるが、ここではより古い時代の高館面を扇状地堆積物の三本木面が覆っていることになる。

（大平）

引用・参考文献

佐々木 辰雄（2005）「第1章 倉越（2）遺跡の地形と地質」『倉越（2）遺跡』青森県教育委員会 青森県埋蔵文化財調査報告書第389集

佐々木 辰雄（2006）「第5章 遺跡周辺の地形と地質」『倉越（2）遺跡II』青森県教育委員会 青森県埋蔵文化財調査報告書第417集

地形区分図

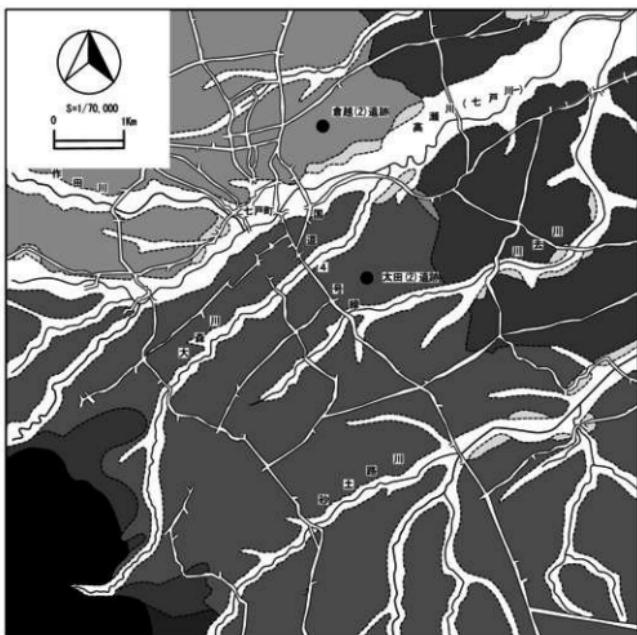


図2 地形分類図

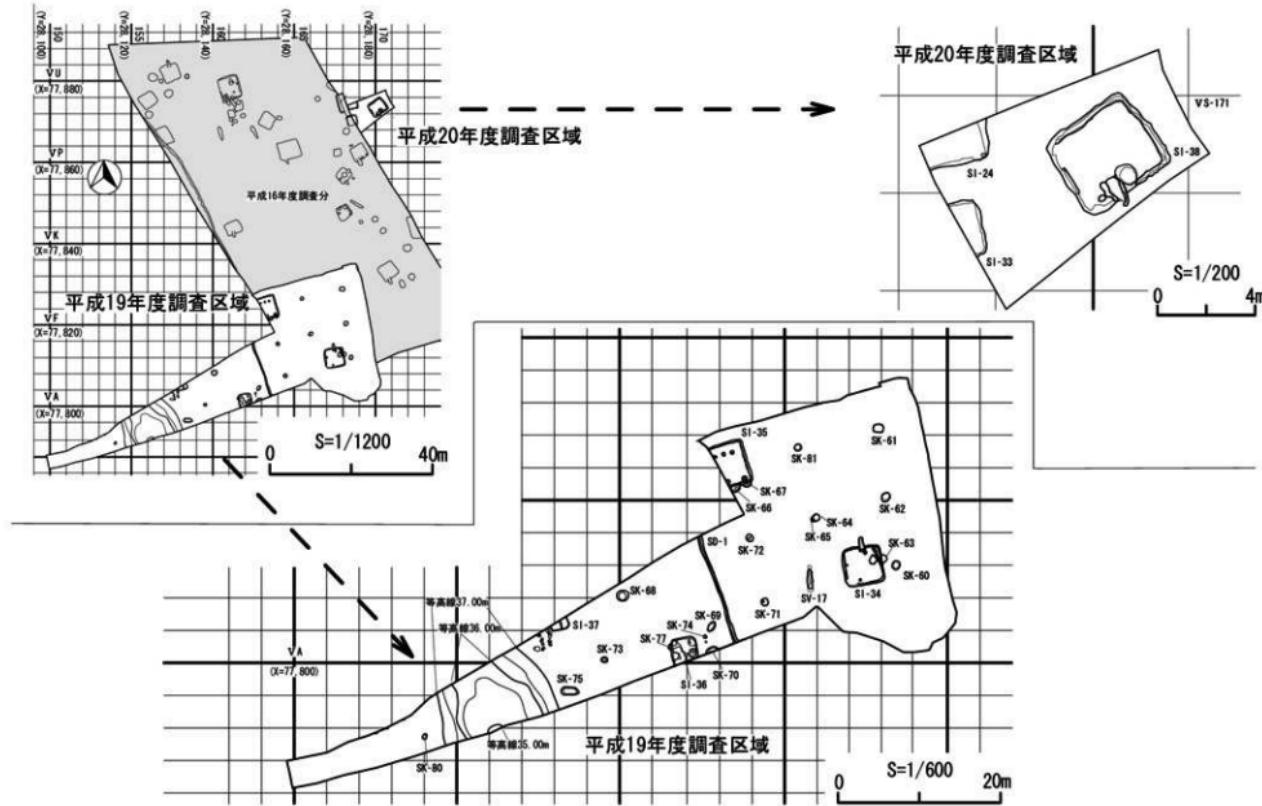
凡 例

- 沖積面
- 低位河岸段丘面
- 三本木面
- 七戸面
- 高館面
- 七百面
- 山地

地分類図
水野・塙田(1991)七戸
水野・塙田(1989)十和田
部分を簡略化

第2編 倉越(2)遺跡Ⅲ

図3 造構配置図



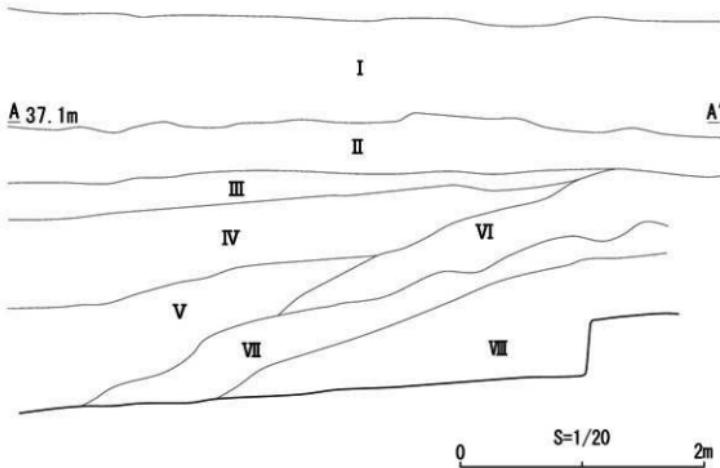
第1章 基本層序と地形

第Ⅰ層は黒色の表土層で、草木の根が目立つ。第Ⅱ層も黒色土であるが、径1mmほどの十和田bの輕石を含んでいる。第Ⅲ層、第Ⅳ層、第Ⅴ層はいずれもアワズナとよばれる中撒浮石を含む層である。第Ⅲ層は黒褐色土の中に黄褐色土が斑状に入る。第Ⅳ層は全体的に暗褐色となり、第Ⅴ層ではやや黒褐色土となる。第Ⅵ層は暗褐色土と黄褐色土の漸移層である。第Ⅶ層は黄褐色土で、粘土質である。第Ⅷ層は灰黄色土で輕石を含む。

なお、第Ⅲ～V層は平成16年度の発掘調査の基本層序である第Ⅲ層を細分化した。また、第Ⅵ層、第Ⅶ層、第Ⅷ層は平成16年度発掘調査の第Ⅳ層、第Ⅴ層、第Ⅵ層に対応する。

調査区の東側半分はおおむね平坦地で、遺構が比較的多く見つかっている。西側半分は南北に延びる谷が2本存在し、東の谷は幅14.7m、地表面から深さ4.5mある。また、西側の谷は幅11.5m、地表面からの深さは2.0mある。2つの谷に挟まれた平坦部では遺構が見つかっているものの、谷の斜面や底部からは遺構は検出されなかった。

(大平)



基本層序地質学	
I層	黒色土 10YR2/1 パミス(Φ1mm以下)1%、しまり小
II層	黒色土 10YR1.7/1 パミス(Φ1mm以下)1%、しまり小
III層	黒褐色土 10YR2/3 ローム粒(Φ2mm以上)2%、炭化物(Φ1~2mm)2%、しまり小
IV層	暗褐色土 10YR3/4 ローム粒(Φ2mm以上)3%、炭化物(Φ1mm以下)1%、しまり小
V層	黒褐色土 10YR2/2 ローム粒(Φ4mm以上)10%、炭化物(Φ1mm以下)1%、しまり小
VI層	黒褐色土 10YR2/2 黒褐色土 10YR2/2 灰化物(Φ2mm以上)30%、炭化物(Φ1mm以下)1%、しまり小
VII層	黄褐色土 10YR3/6 灰化物(Φ2mm以上)2%、しまりやや小
確認	灰黄色土 2.57/2 粘土質土 明黄褐色(10YR6/6)30%、炭化物(Φ1~2mm)3%、しまりやや小

図4 基本層序

第2章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構と出土遺物

倉越(2)遺跡の調査で検出した遺構は、堅穴住居跡7軒、土坑19基、溝跡1条、ピット群が2基である。堅穴住居跡については、第34～38号堅穴住居跡が平成19年度に調査したもので、第24・33・38号堅穴住居跡が平成20年度に調査したものである。なお、第23・33号堅穴住居跡は平成16年度にも調査を実施しているが、平成20年度に検出したものは平成16年度の時点では調査区外にあった東側半分を調査したものである。

なお、第34・35号堅穴住居跡、第60～67・81号土坑、第17号溝状土坑については、平成15・16年度の発掘調査で用いた基本土層に基づいて記載している。

1 堅穴住居跡

第24号堅穴住居跡（S I -24）（図5）

【位置】本住居跡は、平成16年度に住居跡の西側を調査し、その部分については報告済み（青森県2006）である。今回は調査済み住居跡の東側部分の調査を行った。

【重複】本住居跡の東側部分を搅乱穴によって一部が壊されている。

【平面形・規模】コーナー一部が丸みを持ち方形を呈する。規模は開口部長径（2.5）m・短径（1.26）m、底面長径（2.25）m・短径（1.05）mを測る。

【壁・床面】壁は上端から床面にかけて傾斜している。壁高は東壁54cm・西壁不明・南壁54cm・北壁82cmを測る。床面は、ほぼ平坦で堅緻なつくりである。

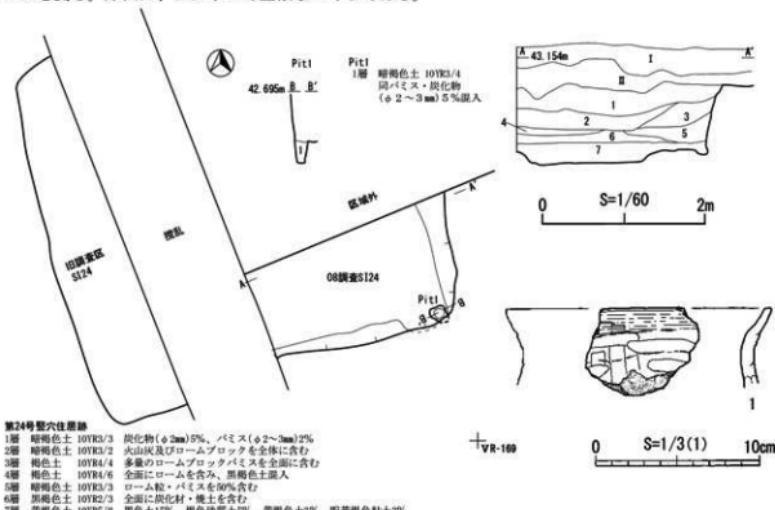


図5 第24号堅穴住居跡

【堆積土】堆積土は7層に分層できた。床面を覆う第6層は炭化材・焼土を多く含み第1～5層はロームブロックを多く含んでいる。このことから、本住居跡は火災を受けた後に人為的に埋土されたと考えられる。

【柱穴】東壁コーナー部から1個検出した。形態は不整形で長径23cm・短径18cm・深さ27cmを測る。

【付属施設・周溝・カマド】検出しなかった。

【出土遺物】遺物は土師器破片が5片出土したのみである。図5-1は土師器の口縁部で甕である。

(成田)

第33号竪穴住居跡（S I -33）（図6）

【位置】本住居跡は平成16年度に住居跡の西側を調査し、その部分については第24号竪穴住居跡と同様に報告済み（青森県2006）である。今回は住居跡の東側部分の調査を行った。北側2mに第24号住居跡を確認した。

【重複】本住居跡の東側部分を搅乱穴によって一部壊されている。

【平面形・規模】コーナー部がやや丸みを持ち方形を呈する。規模は開口部長径（2.35）m・短径（0.9）m、底面長径（2.1）m・短径（0.76）mを測る。

【壁・床面】壁は上端から床面にかけて傾斜している。壁高は東壁34cm・西壁不明・南壁52cm・北壁は50cmである。床面は、ほぼ平坦で堅緻なつくりである。

【堆積土】堆積土は7層に分層できた。床面を覆う第5層は焼土ブロックを全面に含んでいる。このことから、本住居跡は火災を受けた焼失住居と考えられる。

【柱穴・付属施設・周溝・カマド】検出しなかった。

【出土遺物】覆土の中位から上位にかけて、壺1点、小型鉢1点が出土した。

(成田)

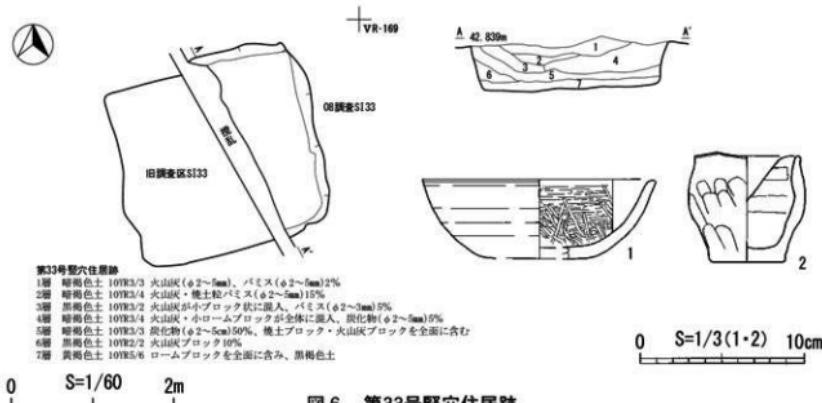


図6 第33号竪穴住居跡

第34号竪穴住居跡（S I -34）（図7）

【位置】VC・VD-166～168グリッドに位置し、南方へ下る緩傾斜地に構築されている。基本土層

のV層上面で暗褐色土と灰白色土（十和田a火山灰）の落ち込みとして平面形を確認した。

【重複】本住居跡の東壁中央から少し北東隅寄りで、第63号土坑と重複する。第63号土坑が本住居跡の東壁上部を切っている。

【平面形・規模】平面形は隅丸方形である。壁長は、北壁が確認面で4.34m、床面で4.04m、東壁が確認面で4.24m、床面で3.78m、南壁が確認面で4.43m、床面で4.16m、西壁が確認面で4.18m、床面で3.98mである。床面積は9.08m²である。

【壁・床面】基本土層のVI～VII層まで掘り込んだ後、黒褐色土とVI層のブロックを主体として全面的に貼床をしている。貼床は南壁側に向かって厚くなり、最大厚は30cmほどである。貼床が薄くなる北壁側では、一部地山（基本土層のVI・VII層）を直接床面としている。床面には緩い凹凸があり、全体として少し南方に傾斜している。遺存状態の良い部分でみると、本住居跡はかなり急角度で掘り込まれているが、壁面の上部には全体的に崩落がみられ、その分壁の傾斜が緩くなっている。確認面からの壁高は、北壁で36～48cm、東壁で27～35cm、南壁で22～30cm、西壁で26～37cmである。

【堆積土】炭化材や焼土の検出により焼失した住居跡とみられ、床面に近い堆積土（4・5層）には炭化材・炭化物や焼土粒が含まれている。家屋焼失後の堆積土は暗褐色土と黒褐色土ないし黒色土を主体とし、自然堆積した状態を示すとみられるが、住居跡の埋没の過程で十和田a火山灰の堆積層（2層）が形成されている。

【周溝】カマドが設置された部分を除いて壁際をほぼ一周するとみられるが、南西隅周辺では掘り方を明確に把握できなかった。周溝の幅は4～22cm、深さは3～18cmである。

【柱穴】床面上ではピット等を全く検出できなかった。貼床を掘削後、カマド前と南壁寄りで小ピット、東壁寄りで大きめのピットを検出したが、柱穴等は不明である。東壁寄りのピットは住居跡の掘り方の底面から掘り込まれており、貼床と同じ土層が堆積している。平面形はかなり不整な円形で、開口部の大きさが96×84cm、掘り方の底面からの深さが40cmほどである。

【付属施設】北壁の北東隅寄りから東壁の中央部に延びる幅8～15cm、深さ9～15cmの溝を検出したが、その用途等は不明である。

【カマド】北壁の中央部に半地下水式のカマドが設置されている。主軸方位は、N-10.5°-Wである。カマドの天井部は完全に崩れ落ちているが、両袖部が遺っており、煙道部と燃焼部を確認した。天井部は基本土層のVII層の土を主に利用して構築されていたようであり、その崩落土（4層）から自然隕が2個出土しているので、部分的に隕を芯材として利用したことも考えられる。袖部は、地山（基本土層のVI・VII層）をそのまま遺すようにして作り出したものである。燃焼部は38×34cmの大きさで最大8cmほど掘り込まれ、中にはシルト質の焼土が堆積していた。

【出土遺物】床面及び床面直上の堆積土（4層）から炭化材と焼土が出土した（図7）。炭化材は住居跡の北西側からやや多く出土したが、全体としてはかなり少ない分量である。形状を判別できるものの大半は板材で、ほかに棒状の材木等がみられる。炭化材のほか、堆積土から平安時代の土師器も少量出土したが、甕の細片がほとんどのため図示しなかった。

【小結】出土遺物及び堆積土から判断して、10世紀前半に降下した十和田a火山灰の降下以前に構築された平安時代の堅穴住居跡とみなされる。また、炭化材や焼土が出土しているので、焼失した住居跡と考えられる。

(工藤)

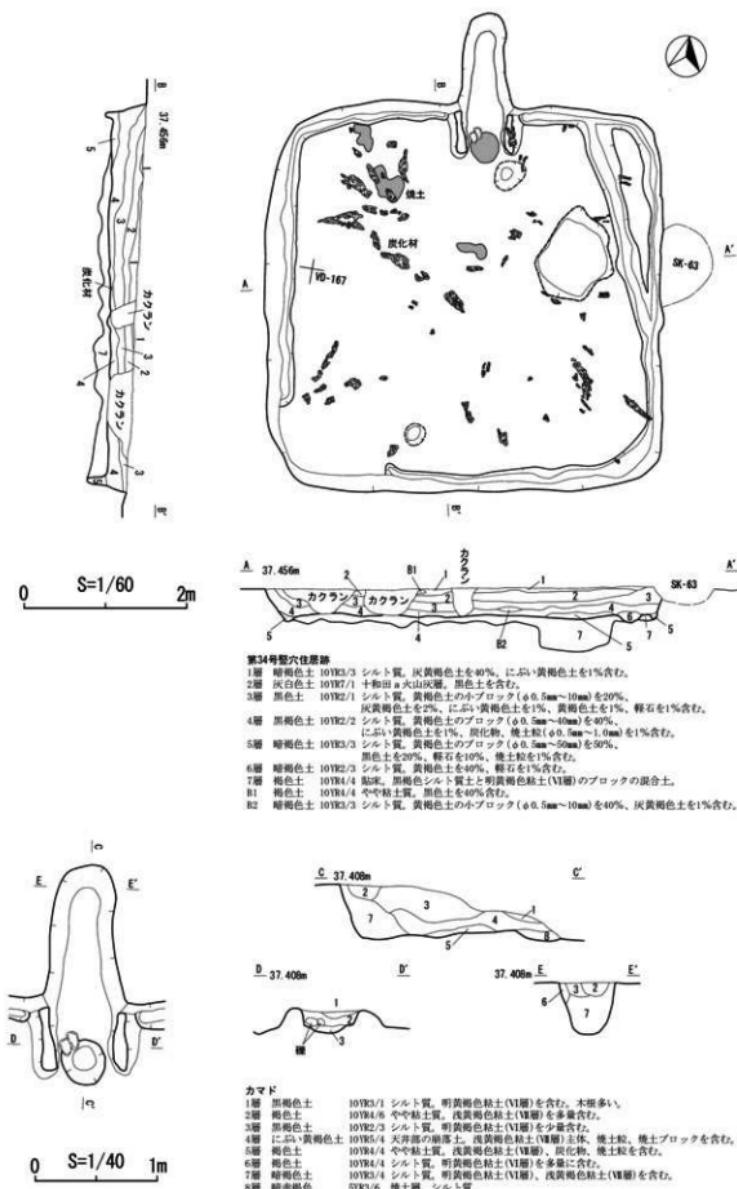


図7 第34号竪穴住居跡

第35号竪穴住居跡（S I -35）（図8～10）

【位置】VF-163・164、VG-162・163グリッドに位置し、少し南方へ下る緩傾斜地に構築されている。基本土層のV層上面で黒色土の落ち込みとして平面形を確認したが、本住居跡の南西側は調査区域外に位置する。

【重複】本住居跡の南東壁の東隅寄りで、第66・67号土坑と重複する。本住居跡が第66・67号土坑の北西側を切っている。

【平面形・規模】平面形は隅丸方形ないし隅丸長方形とみられる。壁長は、北東壁が確認面で5.16m、床面で4.72mである。精査した範囲の床面積は12.67m²である。

【壁・床面】基本土層のI層とIII層の間に構築面があり（本住居跡周辺ではII層が欠けている）、VI～VII層まで掘り込んだ後、暗褐色土とVI・VII層のブロックを主体としてほぼ全面的に貼床をしている。貼床は住居跡の中央部で薄く、各壁側に向かって厚くなる。中央部では一部地山（基本土層のVI層）を直接床面としており、壁寄りでは貼床の最大厚が30cmほどになる。床面には大きな緩い凹凸があり、中央部から南側が少し南方へ傾斜している。本住居跡はかなり急角度で掘り込まれているが、壁面の最上部（基本土層のIII層に相当）は崩落が著しい。掘り込み面からの壁高は、北西壁側で65cm、南東壁側で50cmほどである。

【堆積土】炭化材や焼土粒の検出により焼失した住居跡とみられ、床面に近い堆積土（3層）には焼土粒や炭化物の混入が目立つ。家屋焼失後の堆積土は黒色土と黒褐色土を主体とし、壁寄りに地山（基本土層のV・VI層）の土を多く含んでいる。地山の土の混入は主に壁面の崩落によるもので、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられるが、住居跡の埋没の過程で十和田a火山灰が混入（2層）している。

【周溝】壁際を一周するものとみられる。精査した範囲で、周溝の幅は20～36cm、深さは6～8cmである。

【柱穴】床面上でピットを4個検出した。ピット1（大きさ42×40cm、深さ13cm）は掘り込みが浅く、ピット2（大きさ40×40cm、深さが40cm）は底面が極度に狭まり、壁際に位置するピット3（大きさ62×62cm、深さ50cm）は掘り込みが極端に深く、ピット4（大きさ38×22cm、深さ20cm）は小さすぎて、いずれも主柱穴とは考えがたいものである。

【カマド】南東壁の中央部、調査区域の境目辺りに半地下式と思われるカマドが設置されている。主軸方位は、S-17.3°-E位になる。天井部、左袖部はほぼ完全に崩壊しているが、基本土層のVII層の土を主に利用して構築されていたようである。燃焼部は50cmほどの大きさで、10cm位掘り込まれていて。中にはシルト質の焼土が堆積し、火床面が盛り上がりしている。住居跡の平面図には図示していないが、燃焼部から羽口を転用した支脚（第9図3）が出土しており、燃焼部の掘り方に支脚の設置痕が認められた。

【出土遺物】床面から平安時代の土師器（第9図1）、鉄製品（第9図2）、炭化材、自然礫が出土し、堆積土から土師器（第9・10図4～8）、須恵器（第10図9・10）、鉄滓、炭化材、荒砥石（第10図14）、すり石・敲石の類（第10図11～13）、自然礫などが出土した。床面及びピット内から出土した土師器は少量で、床面出土の坏を除いて、大半は甕の小破片である。堆積土から出土した土師器・須恵器も甕がほとんどである。鉄製品は、床面の北西壁際から1点した。かなり腐蝕が進んでいたが、刀子で

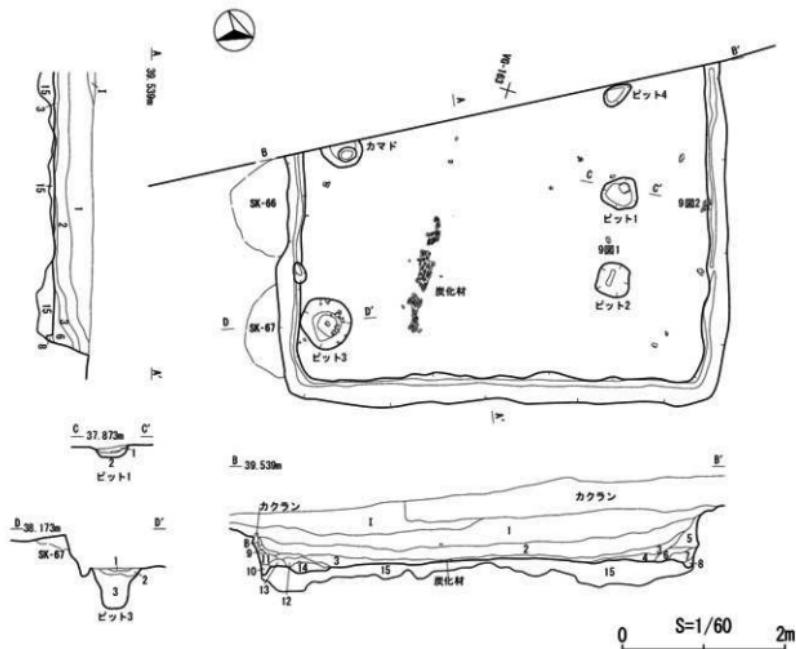


図8 第35号竪穴住居跡(1)

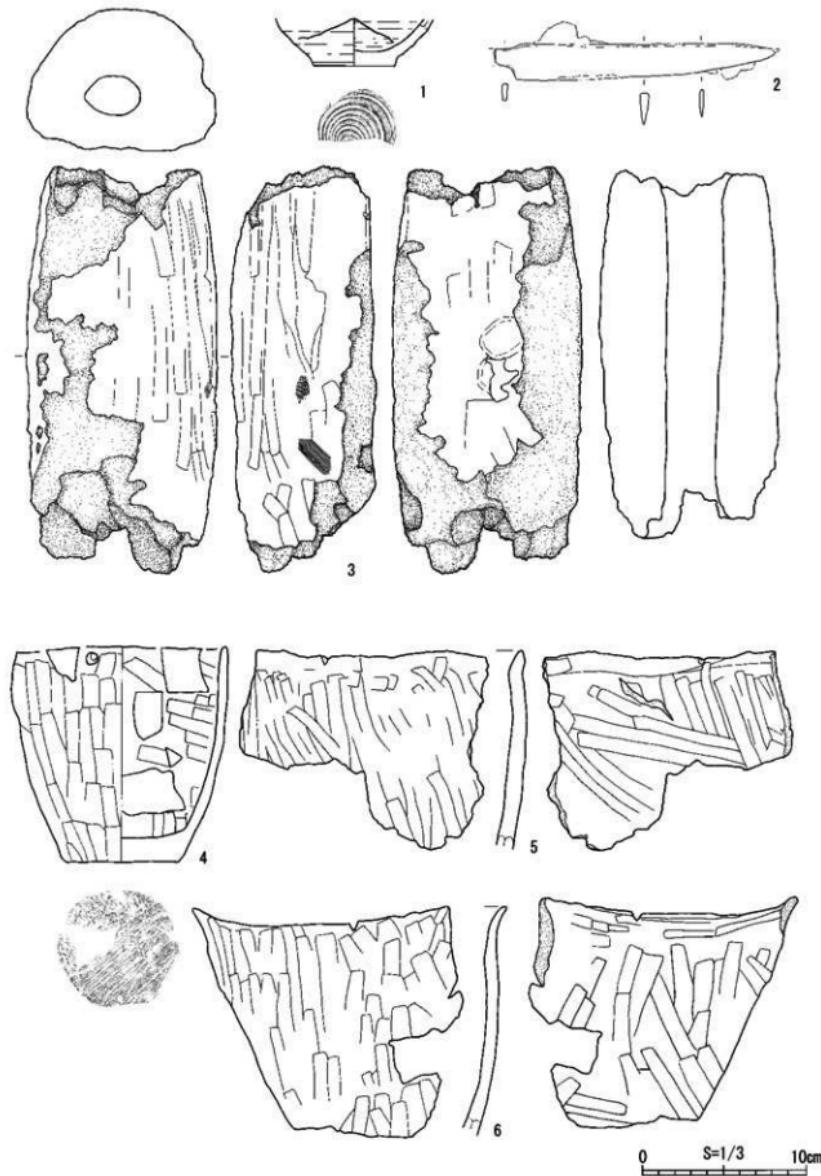


図9 第35号竪穴住居跡(2)

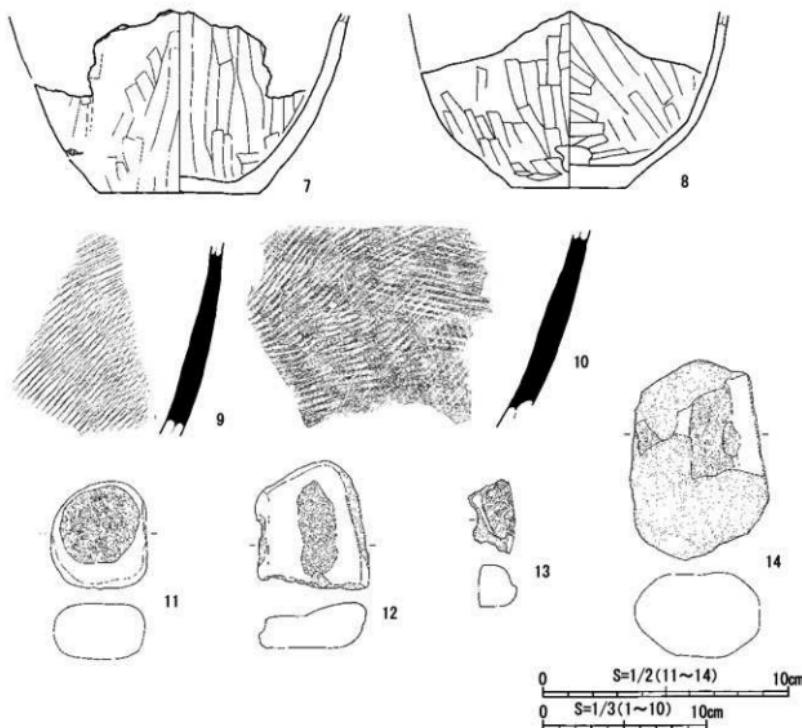


図10 第35号竪穴住居跡(3)

ある。炭化材は東側の床面と、その周辺の堆積土（3層）からごく少量出土した。いずれも板材である。

〔小結〕出土遺物及び堆積土から判断して、10世紀前半に降下した十和田a火山灰の降下以前に構築された平安時代の竪穴住居跡とみなされる。また、炭化材が出土しているので焼失した住居跡と考えられるが、遺存する炭化材はごく少量である。

(工藤)

第36号竪穴住居跡（S I -36）（図11・12）

〔位置〕 VA-161・162グリッドに位置し、IV層で確認した。南壁が調査区外に延びるため、検出されなかった。

〔重複〕 第76号土坑と重複しており、本住居跡のほうが古い。

〔平面形・規模〕 南側が不明であるが、残存部から推定すると、隅丸方形であると考えられる。壁長は東壁が（2.6）m、北壁が3.2m、西壁が（3.1）mである。残存する床面積は（9.0）m²である。

〔壁・床面〕 壁は床面から確認面までほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は東壁で24cm、北壁で53cm、西壁で32cmである。床面はほぼ平坦で硬い作りである。

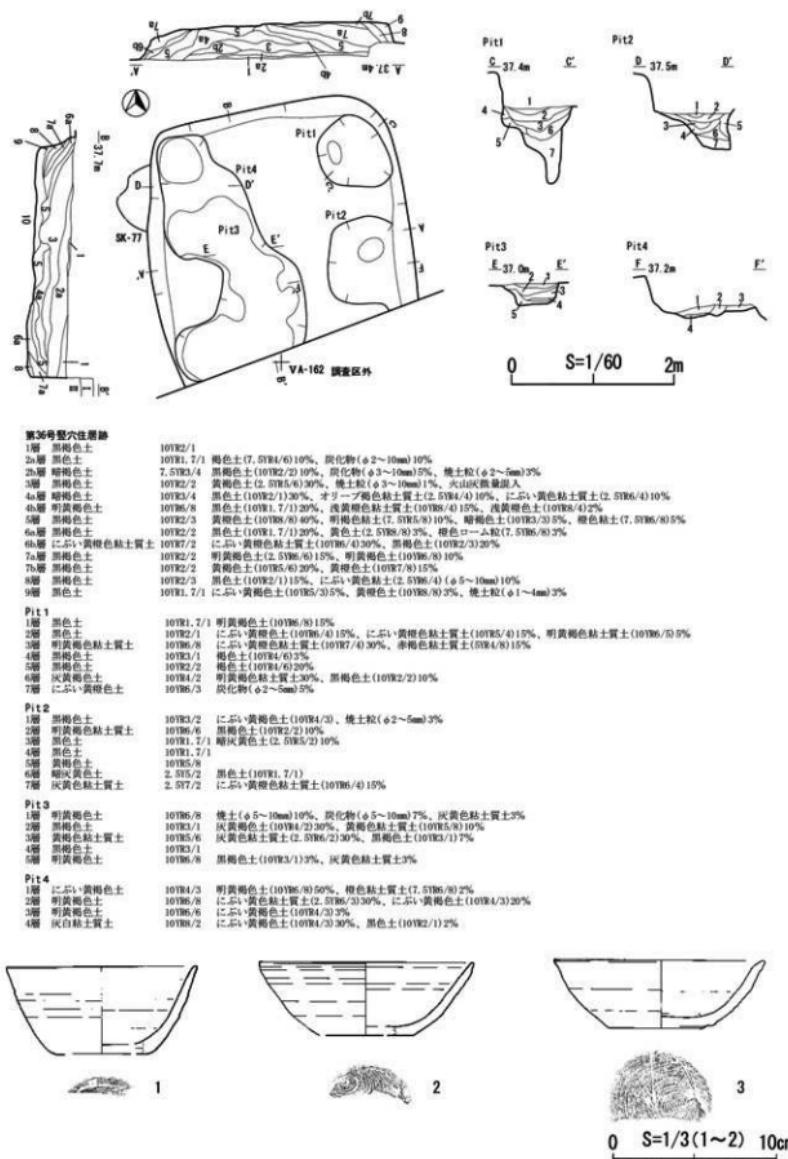


図11 第36号竪穴住居跡(1)

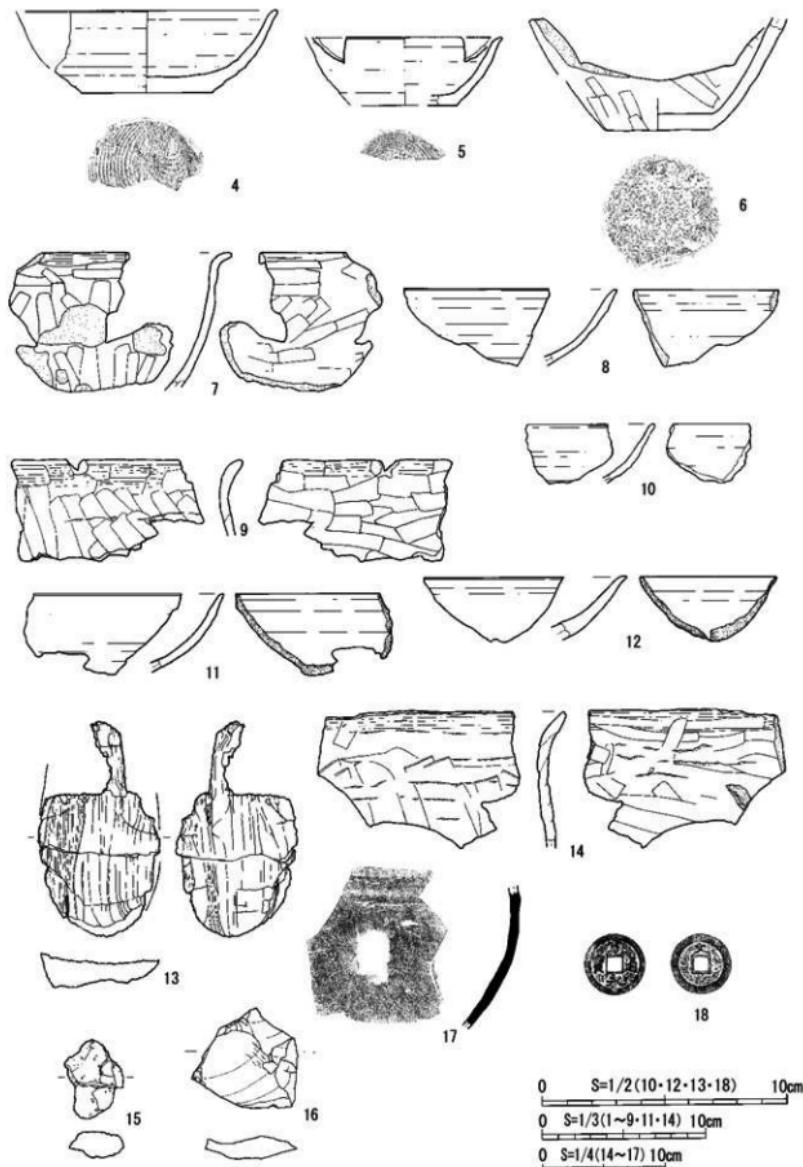


図12 第36号竪穴住居跡(2)

【堆積土】13層に分層した。状況から人為堆積と考えられる。3層には十和田a火山灰と推定される灰白色火山灰がブロック状に混入している。

【周溝】・【カマド】検出しなかった。

【柱穴】住居の壁を一部掘り込んでいる柱穴状のピットを2基(Pit 1・2)検出した。Pit 1は住居北東隅に位置し、 $23 \times 17\text{cm}$ の円形で深さは95cmである。しっかりと掘り込まれていることから、主柱穴の可能性が高い。北西隅から検出したPit 2は $52 \times 48\text{cm}$ の円形で、深さ48cmと浅い。

【付属施設】土坑2基(Pit 3・4)を検出した。Pit 3は複雑な平面形をした土坑である。一番深いところで27cmあり、Pit 2の掘り方と重複する。土層断面からは新旧を判別できなかったが、床面での検出状況から、ほぼ同時期の構築であろう。Pit 4は13cmと浅く、形がはっきりしないため詳細は不明である。

【出土遺物】土師器片、須恵器片、剥片石器、木製品が出土している。1～5・9・18・19は坏で、いずれも内外面共にクロコ整形である。1～5は器形を把握することができる。3は内面にスヌ付着が見られる。2～5の底部は回転糸切痕であるが、1は底部の残存部が少ないと判断できない。6・7・9・13は甕である。6は胴部から外傾しているが、7・9は、「く」字状に外反している。9・13の外面にはケズリがみられる。6は底部のみ残存しており、砂底である。14は須恵器甕の胴部で、この住居からはこの1点のみ出土している。13は珪質頁岩の剥片石器で、表面に剥離痕がみられる。10は椀形の木製品の底部から胴部の一部で第6a層から出土した。中から輕石(12)が出土した。1層上面から寛永通宝が1点出土した。

【小結】堆積土の状況及び出土遺物等から十和田a火山灰降下以前に廃絶した平安時代の堅穴住居跡と考えられる。
(大平)

第37号堅穴住居跡(S I-37)(図13)

【位置】V B-157・158グリッドに位置し、平坦地に立地する。北壁が調査区域外に延びるため、検出されなかつた。

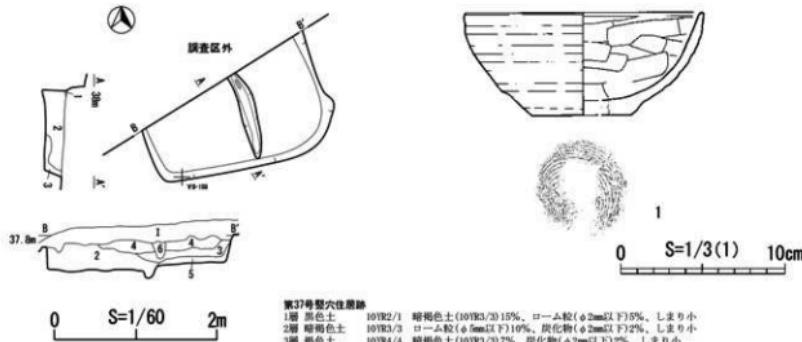


図13 第37号堅穴住居跡

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕北側が不明であるが、残存部から推定すると、隅丸方形であると考えられる。壁長は東壁が(1.5)m、南壁が2.3m、西壁が(0.6)mである。残存する床面積は(2.3)m²である。

〔壁・床面〕壁は南壁で22cmの深さで残存する。また、床は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

〔堆積土〕6層に分層した。全体的にロームブロックが混入しており、人為堆積の可能性が高い。

〔周溝〕・〔柱穴〕・〔カマド〕検出しなかった。

〔付帯施設〕床面上から1条の溝跡が検出された。南北方向に掘り込まれ、検出できた長さは13.8m、深さは20cmである。床面を区画する間仕切りの溝と考えられる。

〔出土遺物〕土師器片が出土した。図示したものは1点(1)で、土師器壺である。内面はナデ調整されている。

〔小結〕堆積土の状況及び出土遺物等から平安時代の堅穴住居跡と考えられる。

(大平)

第38号堅穴住居跡(S I -38)(図14・15)

〔位置と確認〕本住居跡は、調査区の中央部に位置している。東側約3mに第24・33号堅穴住居跡を確認した。

〔重複〕確認しなかった。

〔平面形・規模〕コーナー部が丸みを持ち長方形を呈する。規模は開口部長径4.35m・短径3.55m、床面は長径3.75m・短径3.4mを測る。

〔壁・床面〕壁は上端から床面にかけて傾斜している。壁高は東壁26cm・西壁37cm・南壁25cm・北壁27cmを測る。床面は、ほぼ平坦で堅密な作りである。

〔堆積土〕堆積土は8層に分層できた。床面を覆う第2層及び南壁寄りに堆積している第5層中から焼土・炭化材が混入しており、このことから本住居跡は焼失住居の可能性が考えられる。

〔柱穴〕住居跡の南西壁寄りに楕円形の形態で、長径32cm・短径24cm・深さ18cmを測るピットを検出した。本住居跡に伴う柱穴かどうかは判断できなかった。

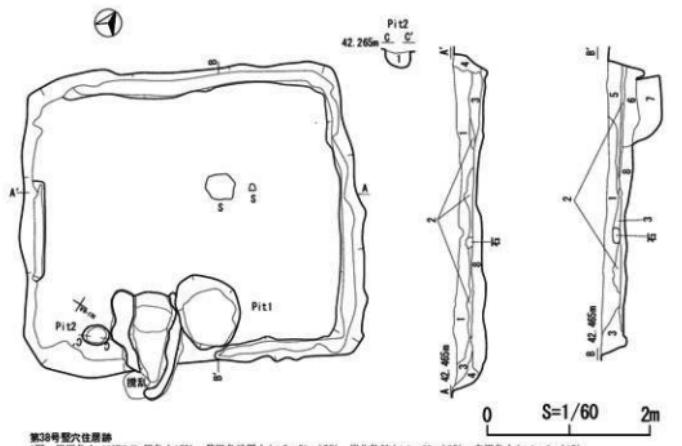
〔付属施設〕カマドの東側で丸みを持つ不整形の形態で長径90cm・短径74cm・深さ35cmの土坑を検出した。住居跡に伴う土坑と思われるが、用途に関しては不明である。

〔周溝〕周溝は西壁寄りで断続的に切れる。幅15cm・深さ4~11cmを測る。

〔カマド〕住居跡の南壁の中央部に位置している。カマドは粘土を用いて構築しており、構築時に土師器の甕を混入して芯材としている。規模は長径135cm・短径94cmを測る。火熱面は第7層上面を火熱面としている。煙道は南側に立ち上がる。遺物はカマドの袖部に及び第2・3層中から出土し、多くは廃棄時に混入した遺物と考えられる。

〔出土遺物〕遺物は、床面で石皿・砥石類1点が出土し、カマド内からは壺1点・甕2点・鉢2点が出土した。しかし床面の遺物は全く出土しなかった。このことは、住居跡内を整理し、その後に意識的に住居を燃やした可能性が高いものと考えられる。

(成田)



第38号竪穴住居跡

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 黒色土15%、黄褐色砂質土($\phi 5\sim50mm$)7%、炭化物粒($\phi 1\sim3mm$)3%、赤褐色土($\phi 1\sim3mm$)1%
- 2層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物($\phi 2cm\sim5cm$) (10YR1, 7/1)30%、黄褐色土30%、赤褐色壤土粒($\phi 1\sim3mm$)1% F3%
- 3層 黒褐色土 10YR2/2 黒色土30%、黒色土10%、黄褐色土($\phi 10mm\leq F$)7%
- 4層 黒褐色土 10YR2/3 黒色土30%、黄褐色土9%，黒色土7%
- 5層 黒褐色土 10YR2/3 黒色土30%、黄褐色土9%，黒色土7%
- 6層 黒褐色土 10YR2/1 同上
- 7層 黒褐色土 10YR2/3 ロームブロック($\phi 2\sim5cm$)15%、塊土粒($\phi 2\sim5cm$)5%
- 8層 黒褐色土 10YR2/3 塵土全面にロームブロックを混入

Pit 2

- 1層 黄褐色土 10YR1/4 黄褐色土15%、黒色土3%、褐色土1%

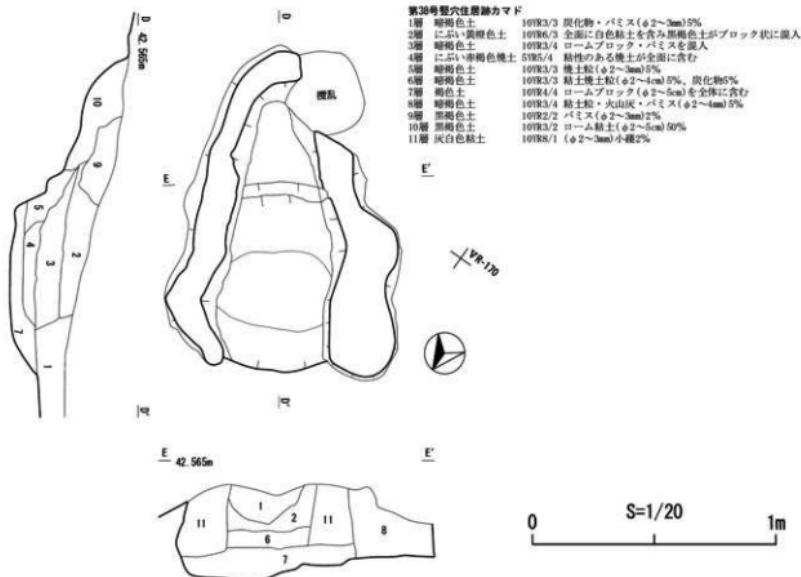


図14 第38号竪穴住居跡(1)

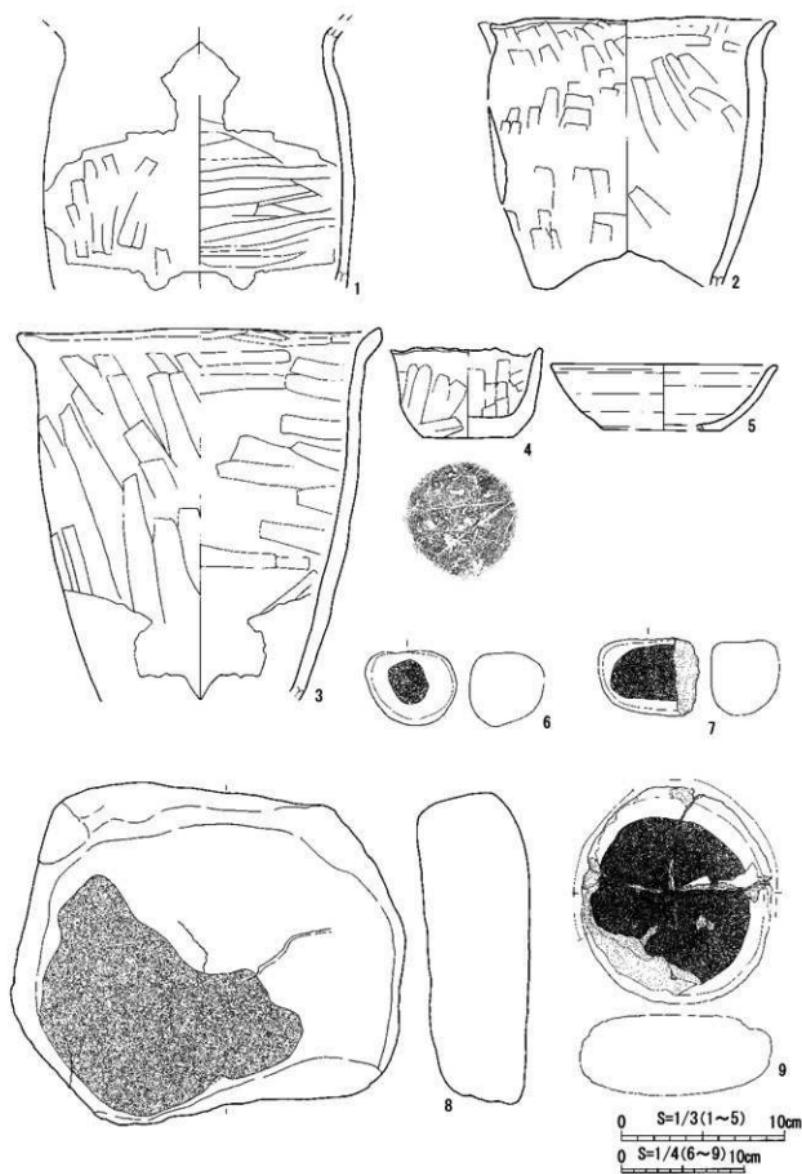


図15 第38号竪穴住居跡(2)

2 土坑

第60号土坑（SK-60）（図16）

【位置】 VC・VD-168グリッドに位置し、基本土層のV層上面で黒褐色土の落ち込みとして平面形を確認した。

【平面形・規模】 平面形は、確認面で長径1.10m、短径0.94mの梢円形、底面で直径0.70mほどの不整円形である。南西壁側の上部が部分的に張り出している。確認面からの深さは約30cmである。

【壁・床面】 基本土層のV層をかなり急角度で掘り込み、同層を底面としている。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】 黒褐色土と黒色土を主体とし、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

【時期】 不明である。

第61号土坑（SK-61）（図16）

【位置】 VH-167・168グリッドに位置し、基本土層のV層上面で黒色土の落ち込みとして平面形を確認した。

【平面形・規模】 平面形は、確認面で長径1.29m、短径1.03m、底面で長径1.16m、短径0.87mの梢円形である。確認面からの深さは10~15cmである。

【壁・床面】 基本土層のV層を掘り込み、同層を底面としている。底面にはかなり凹凸がある。

【堆積土】 黒色土を主体とし、西壁寄りに地山（基本土層のV層）の土を多く含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

【時期】 不明である。

第62号土坑（SK-62）（図16・18）

【位置】 VE・VF-168グリッドに位置し、基本土層のV層上面で黒色土の落ち込みとして平面形を確認した。

【平面形・規模】 平面形は、確認面で長径1.23m、短径1.00m、底面で長径0.95m、短径0.74mのかなり不整な梢円形である。確認面からの深さは30cmほどである。

【壁・床面】 基本土層のV層を緩い角度で掘り込み、同層を底面としている。底面は中央部が大きく凹んでいる。

【堆積土】 黒色土を主体とし、北壁寄りに地山（基本土層のV層）の土を多く含む。自然堆積した状態を示すとみられるが、堆積土中に灰白色の火山灰と焼土を微量含んでいる。

【出土遺物】 堆積土から、縄文時代中期～後期初頭頃の土器片（図18-1・2）が少量出土した。

【時期】 堆積土中の火山灰が十和田a火山灰であれば10世紀前半以前の遺構と考えられ、出土した縄文土器は混入とみなされる。

第63号土坑（SK-63）（図16）

〔位置〕 V D - 167・168グリッドに位置し、基本土層のV層上面で褐色土の落ち込みとして平面形を確認した。

〔重複〕 本土坑の西側で第34号竪穴住居跡と重複する。本土坑が第34号竪穴住居跡の東壁上部を切っている。

〔平面形・規模〕 西壁側の形態を良く把握できなかったが、平面形は確認面で長径1.00m、底面で長径0.90mほどの不整梢円形とみられる。確認面からの深さは約20cmである。

〔壁・床面〕 基本土層のV層を緩い角度で掘り込み、同層を底面としている。底面は中央部がやや凹んで、丸底気味になっている。

〔堆積土〕 地山（基本土層のV層）の土が主体の堆積土で、焼土粒を多少含む。人為的に埋められた状態を示すとみられる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 第34号竪穴住居跡より新しいので、10世紀前半以降の遺構と考えられる。

第64号土坑（S K-64）（図16・18）

〔位置〕 V E - 165・166グリッドに位置し、基本土層のV層上面で黒色土の落ち込みとして平面形を確認した。

〔重複〕 本土坑の南西側で、第65号土坑と重複する。本土坑が第65号土坑の北東側を切っている。

〔平面形・規模〕 平面形は、確認面で直径0.85m、底面で直径0.70mほどの不整円形である。確認面からの深さは22～32cmである。

〔壁・床面〕 基本土層のV層を急角度で掘り込み、同層を底面としている。底面には緩い凹凸があり、全体として大きく南西へ傾斜している。第65号土坑と重複する南西側では、壁面上部の崩落が顕著である。

〔堆積土〕 黒色土を主体とし、底面の近くに地山（基本土層のV層）の土を多く含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

〔出土遺物〕 本土坑の確認面（1層）から、台石の類の破片らしいものが1点出土した。

〔時期〕 不明である。

第65号土坑（S K-65）（図16）

〔位置〕 V E - 165・166グリッドに位置し、基本土層のV層上面で黒褐色土の落ち込みとして平面形を確認した。

〔重複〕 本土坑の北東側で、第64号土坑と重複する。第64号土坑が本土坑の北東側を切っている。

〔平面形・規模〕 平面形は、確認面で直径0.60mほどの円形又は梢円形になるものとみられる。確認面からの深さは、遺存している範囲で約10cmである。

〔壁・床面〕 基本土層のV層を掘り込み、同層を底面としている。遺存する底面はほぼ平坦であるが、南北壁際に小さな浅い凹みがある。

〔堆積土〕 黒褐色土を主体とし、堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 不明である。

第66号土坑（SK-66）（図16）

〔位置〕 V F - 163グリッドに位置し、基本土層のV層上面で黒色土と黒褐色土の落ち込みとして平面形を確認した。

〔重複〕 本土坑の北西側で、第35号竪穴住居跡と重複する。第35号竪穴住居跡が本土坑の北西側を切っている。

〔平面形・規模〕 平面形は、確認面で直径1.20mほどの不整円形又は不整橈円形になるものとみられる。確認面からの深さは、遺存している範囲で約15cmである。

〔壁・床面〕 基本土層のV層を掘り込み、同層を底面としている。遺存する底面には凹凸があり、掘り込みも浅いので、壁が不明瞭になっている。

〔堆積土〕 南東壁寄りの底面直上に、径40cmほどの範囲で焼土（4層）が堆積している。堆積土は黒色土と黒褐色土を主体としているが、南東壁側では下部（3層）に十和田a火山灰の小ブロックと焼土粒を含む。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 第35号竪穴住居跡より古く、堆積土に十和田a火山灰を含むので、10世紀前半以前に構築された平安時代の土坑と考えられる。検出状況も含めて、第67号土坑と良く類似した遺構である。

第67号土坑（SK-67）（図16）

〔位置〕 V F - 163・164グリッドに位置し、基本土層のV層上面で黒褐色土の落ち込みとして平面形を確認した。

〔重複〕 本土坑の北西側で、第35号竪穴住居跡と重複する。第35号竪穴住居跡が本土坑の北西側を切っている。

〔平面形・規模〕 平面形は、確認面で直径1.20mほどの円形又は橈円形になるものとみられる。確認面からの深さは、遺存している範囲で約18cmである。

〔壁・床面〕 基本土層のV層を掘り込み、同層を底面としている。遺存する底面には凹凸があり、掘り込みも浅いので、壁が不明瞭になっている。

〔堆積土〕 南東壁寄りの底面直上に、径40～50cmほどの範囲で焼土（3層）が堆積している。堆積土は黒褐色土を主体としているが、下部（2層）に十和田a火山灰の小ブロックを少量含む。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

〔時期〕 第35号竪穴住居跡より古く、堆積土に十和田a火山灰を含むので、10世紀前半以前に構築された平安時代の土坑と考えられる。検出状況も含めて、第66号土坑と良く類似した遺構である。

(工藤)

第68号土坑（SK-68）（図17・18）

〔位置〕 VC - 159グリッドに位置し、第VI層で確認した。

〔平面形・規模〕 平面形はほぼ円形で、径1.39mである。深さは25cmである。

〔壁・底面〕底面はやや起伏があり、壁は底面から緩やかに立ち上がる。

〔堆積土〕黒褐色土主体で、3層に分層した。第1・2層にはローム・炭化物を含む。

〔出土遺物〕1層から土師器片が2点、土器片が1点出土した。4は土師器の壺で、内面・外面共にロクロ調整である。土器片は表面が剥落しており、時期等の詳細は不明である。

〔時期〕出土遺物や堆積土の状況から平安時代と推定される。

第69号土坑（SK-69）（図17）

〔位置〕VC-162グリッドに位置し、第VI層で確認した。

〔平面形・規模〕平面形は梢円形で、1.4×0.8mの大きさである。深さは10cmである。

〔壁・底面〕壁は底面から開くように立ち上がり、北東側は緩やかである。VII層を底面とし、ほぼ水平である。

〔堆積土〕2層に分けられる。ロームを含んでおり、しまりは小さい。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕堆積土の状況から平安時代以降と推定されるが、詳細な時期は確認できなかった。

第70号土坑（SK-70）（図17）

〔位置〕VA-162グリッドに位置し、第VI層で確認した。

〔平面形・規模〕遺構の南側部分は調査区外へ延びているが、平面形はほぼ円形と推定される。検出した遺構の大きさは径1.6mの大きさで、深さは92cmである。

〔壁・底面〕壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。第VII層を底面とし、断面形状は弧状を呈する。

〔堆積土〕黒褐色土主体で、3層に分けられる。1層には十和田a火山灰とみられる火山灰ブロックが混入する。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕堆積土の状況から平安時代の土坑と推定される。

第71号土坑（SK-71）（図17）

〔位置〕VB-164グリッドに位置し、第IV層で確認した。

〔平面形・規模〕平面形はほぼ円形で、径0.82mである。深さは58cmである。

〔壁・底面〕第VII層を底面とし、断面形状は弧状を呈する。

〔堆積土〕黒褐色土主体で、3層に分けられる。ロームや浮石の混合土層であり、人為堆積の可能性が高い。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕堆積土の状況から平安時代以降と推定されるが、詳細な時期は確認できなかった。

第72号土坑（SK-72）（図17・18）

〔位置〕VE-163グリッドに位置し、第VI層で確認した。

〔平面形・規模〕平面形はほぼ円形で、径0.89mである。深さは50cmである。

〔壁・底面〕 第VI層を底面とし、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

〔堆積土〕 2層に分けられる。黒色土主体で、2層にはローム粒を含む。

〔出土遺物〕 遺構上面から土器片1点が出土した。5は粗製深鉢の胴部である。

〔時期〕 検出状況から、縄文時代の土器片は後世に混入した可能性がある。遺構の構築時期は平安時代以降と推定されるが、詳細な時期は確認できなかった。

第73号土坑（SK-73）（図17）

〔位置〕 VB-159グリッドに位置し、第VI層で確認した。

〔平面形・規模〕 平面形はほぼ円形で、径0.71mである。深さは30cmである。

〔壁・底面〕 壁はほぼ垂直に立ち上がる。第VII層を底面とし、ほぼ水平である。

〔堆積土〕 3層に分けられ、第VII層を底面とする。ロームがブロック状に混入していることから、人為堆積と思われる。

〔出土遺物〕 1層から土師器片が1点出土したが、小片のため図示していない。

〔時期〕 出土遺物や堆積土の状況から平安時代以降と推定される。

第74号土坑（SK-74）（図17）

〔位置〕 VB-162グリッドに位置し、第VI層で確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は円形で径0.32mである。深さは13cmである。

〔壁・底面〕 壁は垂直に立ち上がる。第VI層を底面とし、ほぼ水平である。

〔堆積土〕 2層に分けられる。堆積土の状況から自然堆積である。

〔出土遺物〕 なし。

〔時期〕 堆積土の状況から平安時代以降と推定されるが、詳細な時期は確認できなかった。

第75号土坑（SK-75）（図17）

〔位置〕 VA-158グリッドに位置し、第VI層で確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は梢円形で、 $2.2 \times 0.9m$ の大きさである。深さは35cmである。

〔壁・底面〕 壁は垂直に立ち上がる。第VII層を底面とし、ほぼ水平である。

〔堆積土〕 2層に分けられ、堆積土の状況から人為堆積である。

〔出土遺物〕 炭化材が数多く検出された。調査当初は製炭遺構の可能性を考えたが、遺構内に焼土がみられなかつたので、炭化材を遺棄した土坑であると考えた。この炭化材の放射性炭素年代測定を行ったところ、掘り込まれた地層中の木炭であった可能性を検討する必要があるとの結果を得ていることから、土坑に遺棄された木炭である可能性が高い。

〔時期〕 堆積土の状況から平安時代以降と推定されるが、詳細な時期は確認できなかった。

第76号土坑（SK-76） 欠番

第77号土坑（SK-77）（図17・18）

〔位置〕 VA-161グリッドに位置し、第VI層で確認した。

〔重複〕 第36号竪穴住居跡と重複しており、本遺構のほうが新しい。

〔平面形・規模〕 当初、本遺構は第36号竪穴住居跡に付随するカマドと考え調査をした。よって東側半分の形状は不明であるが残存部から橢円形であると思われる。大きさは残存部で（0.76）×（0.37）m、深さは（5）cmである。

〔壁・底面〕 底面から緩やかに立ち上がる。底面形状は弧状を呈するものと思われる。

〔堆積土〕 1層のみの単層で、黒色土を主体としている。

〔出土遺物〕 土師器3点を図化した。ただし、出土した土器片の一部は第36号竪穴住居跡のものである可能性がある。8は高台壇で底部のみの出土である。

第78号土坑（SK-78） 欠番**第79号土坑（SK-79） 欠番****第80号土坑（SK-80）（図17）**

〔位置〕 IVX-153グリッドに位置し、第VI層で確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は橢円形で、0.5×0.6mの大きさである。深さは28cmである。

〔壁・底面〕 壁面は緩やかに立ち上がる。第VII層を底面とし、やや起伏がある。

〔堆積土〕 3層に分けられる。黒褐色土を主体とした人為堆積である。

〔出土遺物〕 なし

〔時期〕 堆積土の状況から平安時代以降と推定されるが、詳細な時期は確認できなかった。

(大平)

第81号土坑（SK-81）（図17）

〔位置〕 VG-165グリッドに位置し、基本土層のV層上面で黒褐色土の落ち込みとして平面形を確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は、確認面で直径約0.85m、底面で直径約0.7mの不整円形である。確認面からの深さは22～26cmである。

〔壁・底面〕 基本土層のV層を掘り込み、同層を底面としている。底面には凹凸がある。壁面には崩落がみられ、壁の傾斜が緩くなっている。

〔堆積土〕 黒褐色土を主体とし、壁寄りに崩落した地山（基本土層のV層）の土を含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

〔出土遺物〕 堆積土から、土器の細片が出土した。縄文土器と思われるが、時期等は不明である。

〔時期〕 不明である。

(工藤)

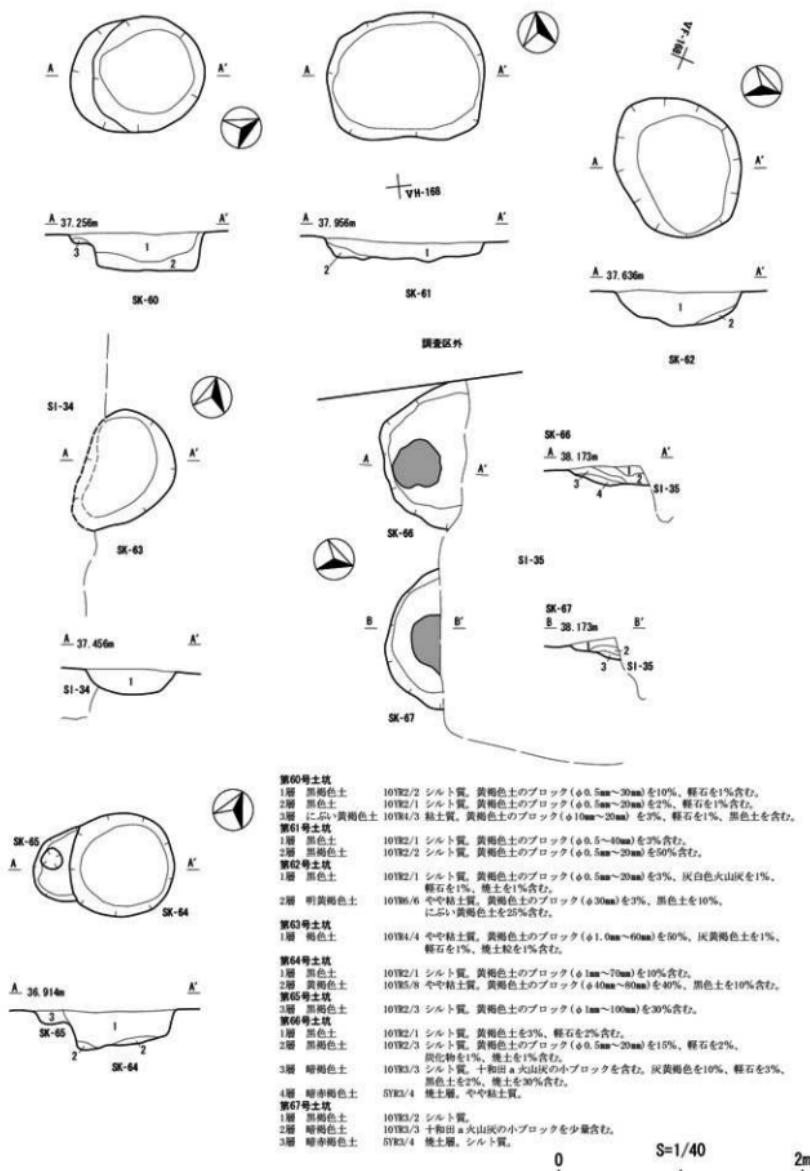
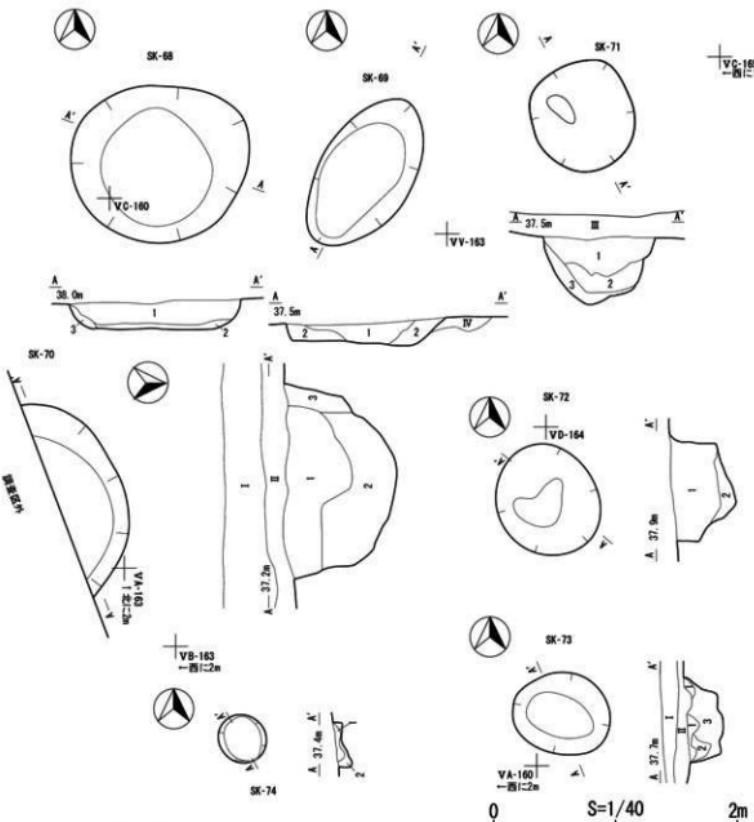


図16 土坑(1)



第68号土坑
1層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒(φ1~10mm)10%、炭化物(φ1~5mm)5%、しまり小
2層 黒褐色土 10YR2/3 明黒褐色土(10YR6/8)20%、炭化物(φ1~5mm)3%、しまり小
3層 明黄褐色土 10YR6/6 粘土質、炭化物(φ1~5mm)3%、しまり小

第69号土坑
1層 黒褐色土 10YR2/2 明黒褐色土(10YR6/8)10%、バニス(φ1mm以下)5%、ローム粒(φ2mm以下)5%、しまり小
2層 黒褐色土 10YR3/3 ローム粒(φ1mm以下)2%、バニス(φ1mm以下)1%、しまり小

第70号土坑
1層 黄褐色土 10YR2/2 黄褐色土(2.5YR4/5)5%、炭化物(φ1~2mm)3%、しまり小
2層 黑褐色土 7.5YR2/2 楊葉土(10YR4/10)10%、炭化物(φ1~2mm)3%、しまり小
3層 黑褐色土 7.5YR2/2 バニス(φ1mm以下)3%、しまり小

第71号土坑
1層 黑褐色土 10YR2/2 バニス(φ1mm以下)2%、ローム粒(φ1~5mm)10%、しまり小、炭化物(φ1~5mm)2%
2層 黑褐色土 10YR2/2 バニス(φ1mm以下)2%、ローム粒(φ1~5mm)2%、炭化物(φ1mm以下)1%、しまり小
3層 黄褐色土 10YR5/8 粘土質、しまり小

第72号土坑
1層 黒色土 10YR2/1 明黄褐色土(10YR6/8)7%、バニス(φ1mm以下)1%、しまり小
2層 明黄褐色土 10YR5/8 ローム粒(φ1~2mm)10%、炭化物(φ1mm以下)1%、しまりや小

第73号土坑
1層 黑褐色土 10YR3/4 炭化物(φ1mm以下)2%、ローム粒(φ1mm以下)5%
2層 黄褐色土 10YR5/6 しまり小
3層 黄褐色土 10YR2/2 炭化物(10YR2/1)15%、炭化物(φ1mm以下)1%、しまり小

第74号土坑
1層 黑褐色土 10YR2/2 バニス(φ1mm以下)5%、しまり小
2層 黑褐色土 10YR3/4 ローム粒(φ1~2mm)3%、しまり小

図17 土坑(2)

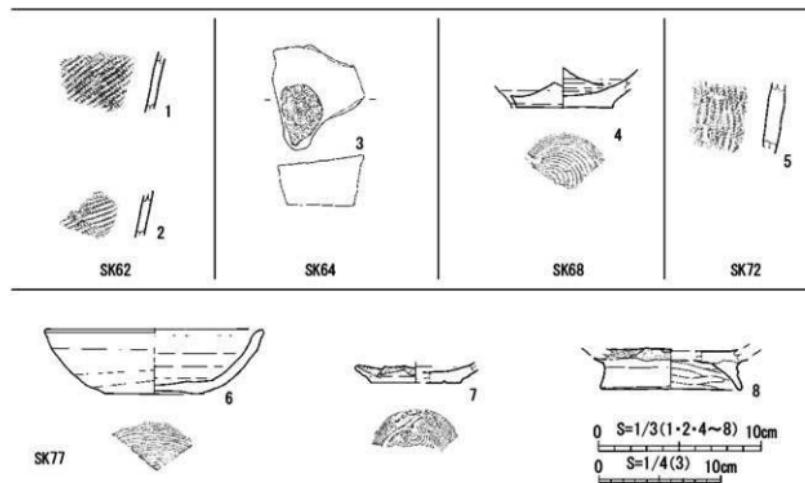
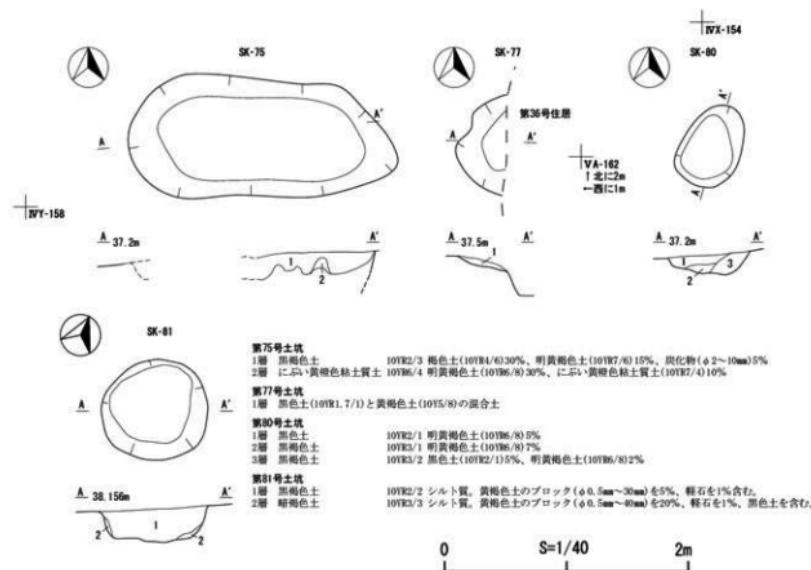


図18 土坑(3)

3 溝状土坑

第17号溝状土坑（S V-17）（図19）

【位置】 VC・VD-165グリッドに位置し、調査区域南側の沢に面した急傾斜地に構築されている。基本土層のⅢ層相当層中で黒褐色土と黒色土の落ち込みとして平面形を確認した。

【平面形・規模】 平面形は、直線的な短い溝状の形態になっている。大きさは、確認面で長さ2.40m、幅0.70m、底面で長さ3.32m、最大幅0.68mである。底面の両端部が開口部よりも外側に張り出して、大きく膨らんでいる。確認面からの深さは1.10~1.20mである。

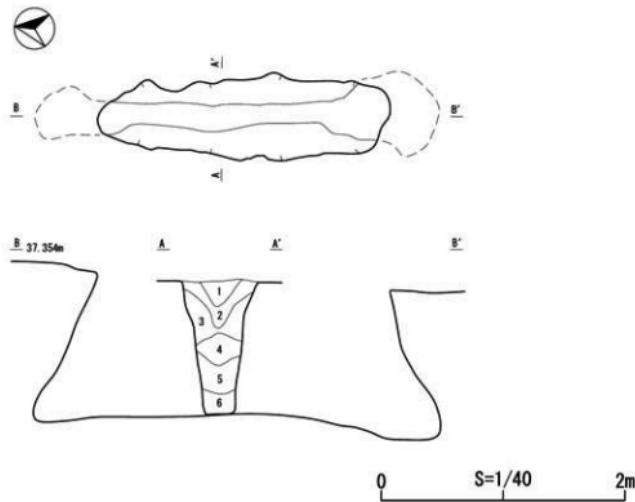
【壁・床面】 基本土層のⅦ層まで急角度で掘り込み、同層を底面としている。底面の中央部から北側はほぼ平坦であるが、南側はかなり南方へ傾斜している。壁面の上部は全体的に崩落しており、特に土坑の中央部では壁面の崩落のため開口部が拡がっている。

【堆積土】 黒褐色と黒色土を主体とし、下部に崩落した地山（基本土層のIV・VII層）の土を多く含む。堆積土は自然堆積した状態を示すとみられる。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

【時期】 類例から縄文時代の土坑と考えられる。

(工藤)



第17号溝状土坑

1層	黒褐色土 10R2/3	シルト質。褐色土のブロック(φ0.5m~10cm)を40%、中粒砂石を30%含む。
2層	黒色土 10R2/2	シルト質。黄褐色土を1%含む。
3層	黒褐色土 10R2/2	シルト質。褐色土(IV層相当層)を40%含む。
4層	黒色土 10R1.7/1	シルト質。黄褐色土・灰褐色土(IV層相当層)を50%含む。
5層	黒褐色土 10R2/2	シルト質。黄褐色土・灰褐色土(IV層相当層)・浅黄色土(Ⅷ層)を40%含む。
6層	黒褐色土 10R3/2	シルト質。浅黄色土を40%含む。

図19 溝状土坑

4 溝跡

第11号溝跡（S D-11）（図20）

【位置】 VA-163～VD-162グリッドに位置し、第VI層で確認した。南北両端とも調査区外に延びている。

【重複】なし。

【構造】 北北西から南南東方向へ延びる溝跡で、確認部分の長さ13.7m、幅47～28.5cm、深さ40cmほどである。

【堆積土】 南側、北側共に2層に分層した。北側は黒色土を主体としており、底部にローム粒がみられる。南側の底部は明黄褐色土で、ローム粒が多く堆積している。

【出土遺物】なし。

【小結】 時期決定の根拠に乏しいが、位置や堆積土の状況から排水や区画等を主用途とした平安期以降の溝跡と推定される。

(大平)

5 ピット・ピット群

本調査区から14基のピットを検出した。そのうち13基は2つのピット群に分けられ、それぞれ第1ピット群、第2ピット群と命名した。

第1ピット群（図20）

【位置】 VA・VB-157グリッドの範囲内に10基検出した。ピット2～4・12及びピット5～8・13は南北を軸として、それぞれほぼ列状に並ぶ。間隔についての規則性はない。

【出土遺物】 ピット14の1層からは土器片が1点出土した。67は縄文時代中期後葉から後期前葉の土器で、口頸部から胴部下半のものと思われる。0段多条（R L）を施文しており、表面にはスス状の炭化物が付着している。

【小結】 柱穴の掘り方は円形や橢円形など様々で、深さも揃ってはいない。ピット14から縄文土器（1）が出土しているが、堆積土は黒色土の単層で表土と区別がつきにくいため、後世に混入した可能性がある。よって中世または近世～現代までの耕作等に関わる杭跡とも考えられる。

第2ピット群（図20）

【位置】 IV X・IV Y-152・153グリッドの範囲内に3基検出した。ピット9～11は西南西一東北東を軸として、ほぼ列状に並ぶ。間隔についての規則性はない。

【出土遺物】なし。

【小結】 北側が調査区外に延びるため、形は断定できないが堆積土には火山灰等が見られない。中世または近世～現代までの耕作等に関わる杭跡とも考えられる。

(大平)

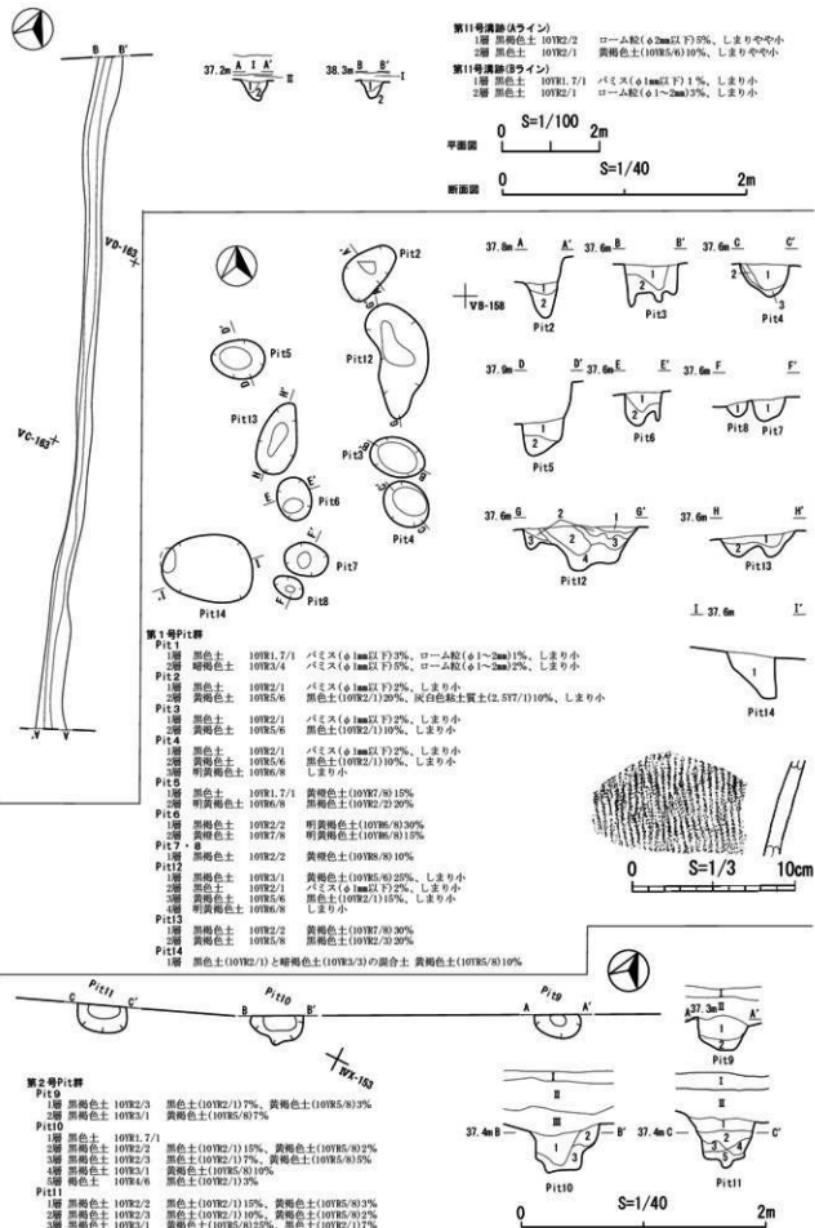


図20 滅跡・ピット群

第2節 遺構外出土遺物

1 繩文土器 (図21)

18点出土し、そのうち13点を図化した。出土地点は調査区東側から比較的多く出土しているが出土地点は散在しており、出土層位はI・II層である。特徴として、平口縁で口頭部が内反する深鉢系の土器と思われ、粗製繩文である。また、器内外面にスス状炭化物の付着がみられるものが多く、煮沸に使用した可能性がある。器面の施文は口唇部よりから底辺部にかけて全面に繩文を施文している。時期は器厚の薄さ及び口唇部のつくり方から判断して、繩文時代中期後葉から後期前葉にかけてのものと思われるが、形式名は判断できない。

図21-1～3は土器の底部で平底である。1は底面に網代痕がみられ、1・2は内面にスス状炭化物の付着が見られる。4・6・7は口縁部で平口縁である。7の外面にはイネ科植物の茎の混入しており、土器製作時の混入物を知る上で貴重な資料となり得るものである。8は外面に、11は内面にスス状炭化物の付着がみられる。文様は4が繩文R Lだが、他はすべて繩文L Rである。

2 石器 (図21)

剥片石器

5点出土した。いずれもスクレイバーで、石質は珪質頁岩である。21の一部には押圧剥離痕が施され、使用痕と思われるものが見られる。

礫石器

2点出土した。いずれも敲磨器類である。15は安山岩で、上面及び左側面に擦り痕が見られる。16はディサイトで、上面及び上端部に敲き痕がみられる。上面のくぼみ痕は敲打痕の集中によって生じたものである。

3 古代から近世の遺物 (図21)

土師器

132点出土し、そのうち1点を図示した。22はロクロ成形による坏で、回転糸切り底である。

須恵器

6点出土し、そのうち3点を図示した。23は短頭壺の口縁部から頭部にかけてのもので、口縁部は外側に大きく外反する。23は短頭壺の口縁破片、24は壺の胴部で、器表面はヘラナデである。25は器表面にタタキがみられるものである。

石器

有孔石製品が1点(17)出土した。凝灰岩で両側から穿孔がなされている。右側を欠損しているが、残存部から円形を呈すると思われる。

土製品

近世の土人形の一部と思われるもの(14)が1点出土した。残存部が少ないので詳細は不明だが、形態から吸口とみられる。

(土師器・須恵器・成田・大平 その他一大平)

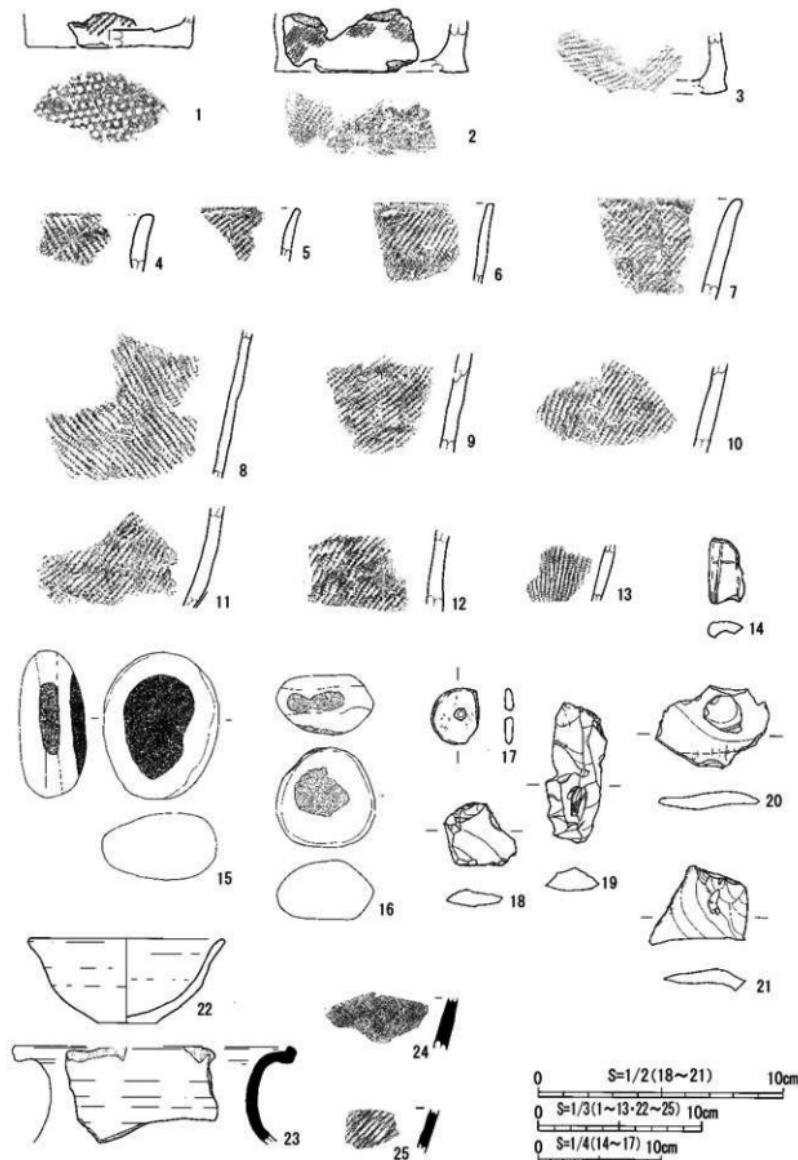


図21 遺構外出土遺物

第3章　まとめ

倉越(2)遺跡は、平成15・16年度及び平成19・20年度に発掘調査を行った。今回の報告は平成19・20年度の発掘調査報告である。調査の結果、検出された遺構数は、竪穴住居跡7棟（内、2棟は平成16年度発掘調査で調査区外に伸びていた住居跡）、土坑19基、溝跡1条、溝状土坑1基、ピット群2基である。

今回の調査で検出した竪穴住居跡は4棟とも方形を呈し、いずれも他の住居との重複はみられなかった。第34号竪穴住居跡は全体の形態が分かれるような状況で検出した。カマドは北壁に面した半地下式のもので、煙道部と燃焼部を確認している。天井部の崩落土部分から自然縛が2個出土していることから、部分的に縛を芯材とした可能性がある。また、この住居跡の焼土及び炭化材の検出状況から焼失住居であると考えられる。その他の3棟は一部が調査区外に伸びているので、全体的な形状は断定できなかった。第35号住居跡からも半地下式のカマドを検出したが、調査区域との境目に位置しており、カマドの形状は把握できなかった。燃焼部からは羽口を転用した支脚が出土している。

溝跡は調査区を南北に横切るような形で、第11号溝跡が検出された。途中で調査区外に伸びるために断定はできないが、北側は平成16年度の調査で検出された第1号溝跡へ続く可能性がある。また南側は谷へと延びていると思われる。今回の調査では帰属時期の特定はできなかったが、平成16年度の調査でも平安時代の溝跡の可能性を示唆しただけで、火山灰降下との前後関係は不明との調査結果が出ている。いずれにせよ、形態や周辺の地形から主に集落周辺の排水のために構築された可能性が考えられる。

出土遺物については第35・36号竪穴住居跡からの出土が多い。第35号住居跡からは羽口が出土しているが、土師器の甕は緩やかに頸部が屈曲するものが多い。また、土師器の壺はロクロ調製のものが多い。土師器の出土状態は破片が散在して出土するものが多く、完形品は第35号住居跡から出土した土師器の甕1点のみである。第36号竪穴住居跡から木製の椀の一部と思われるものが出土している。炭化しており、完形ではないので全体の大きさ等は不明である。

縄文時代の遺物としては、土器片が若干出土した。すべてが破片資料であり、完形品はないので、全体の大きさや形態は判断できない。また、縄文時代と思われる遺構も検出されなかつたことから、この時代の状況は不明である。

調査区内で検出した遺構や出土遺物、火山灰の堆積状況から、今回調査した倉越(2)遺跡は平安時代の集落跡であると考えられる。今回の調査範囲は広くはないが、平成15・16年度の発掘調査で検出された集落跡の一部を構成するものである。

(大平)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会（2005）『倉越(2)遺跡・大池館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第389集
- 青森県教育委員会（2006）『大沢遺跡・寒水遺跡・倉越(2)遺跡II・大池館遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第417集
- 青森県教育委員会（2007）『太田野(2)遺跡・太田野(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第427集
- 青森県教育委員会（2008）『太田野(2)遺跡II・太田(1)遺跡・北野(1)遺跡・北野(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第455集
- 宇部 則保（2002）「東北北部型土師器にみられる地域性」『海と考古学とロマン—市川金丸先生古稀記念論文集』市川金丸先生古稀を祝う会

第3編 太田(2)遺跡

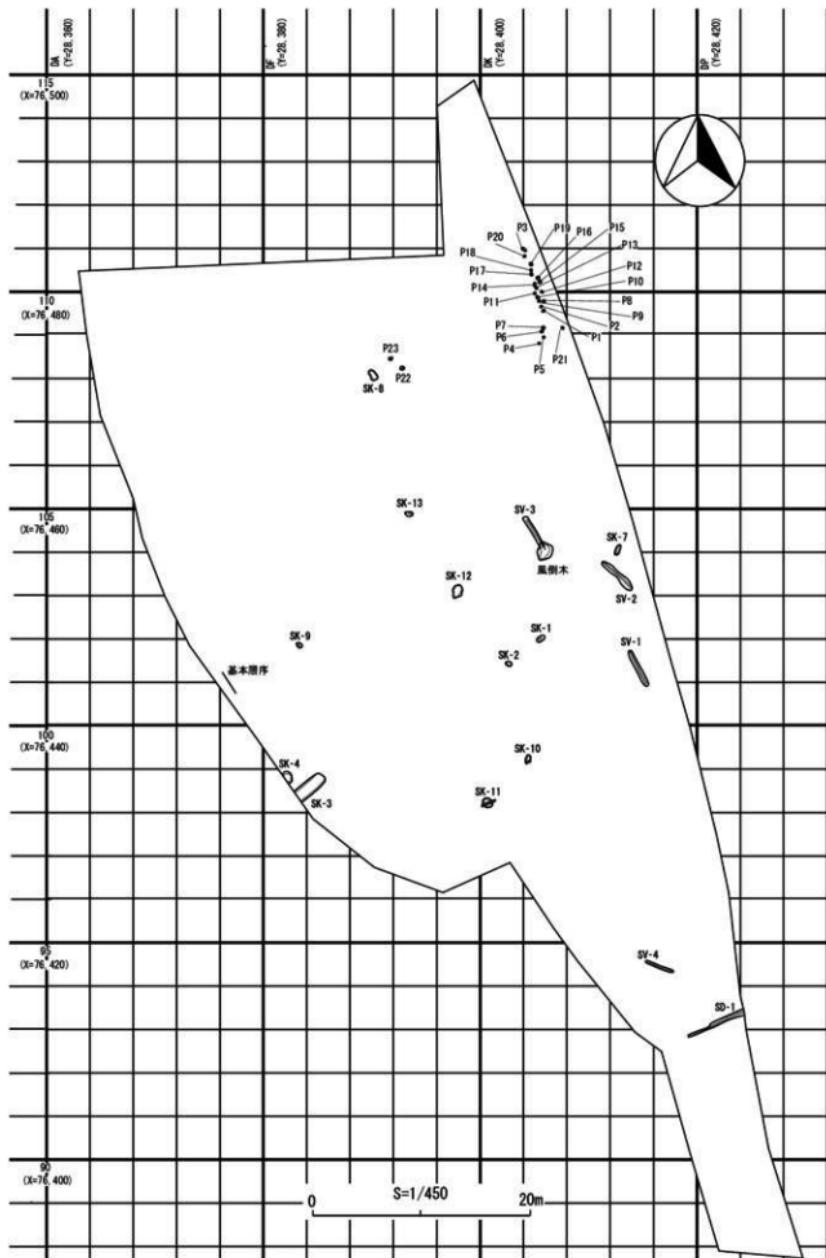


図22 遺構配置図

第1章 基本層序と地形

層位は第I～VI層の6層区分をおこなった。第I層は黒色土で草木痕の多い表土層、第II層は黒色土で黒褐色土が混入している層であり、遺構外の遺物も第II層中からの出土が多い。第III層は黒褐色土で、アワ砂を含む層である。第IV層は褐色土で黒褐色土を含む。第V層・第VI層は地山層である。遺構は、第IV・V層で検出した。

地形は大林川右岸と川去川左岸に位置し、沢筋と台地が連なる台地に位置している。調査区は標高約35mで東側から西側に傾斜しており、現状は山林である。平成18年度に当センターが確認調査を実施している。本年度の調査範囲は2,800m²である。

(成田)

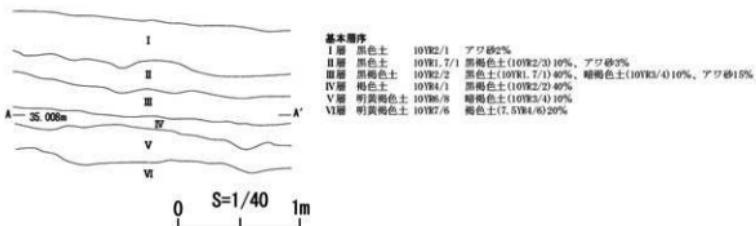


図23 基本層序

第2章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構と出土遺物

1 土坑

第1号土坑（SK-1）（図24）

【位置と確認】本遺構は調査区東側の平坦面で、グリッドD L-102・103に位置している。第III層面を精査中に確認した。

【平面形・規模】平面形は全体に丸みを有する梢円形である。規模は、長径0.82m・短径0.46mを測る。

【壁・底面】壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁24cm・西壁22cm・南壁21cm・北壁16cmを測る。底面は東側から西側にかけて傾斜している。

【堆積土】褐色土が混入した黒色土で区分できなかった。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

第2号土坑（SK-2）（図24）

【位置と確認】本遺構は調査区東側の平坦面で、グリッドD K-101に位置している。第III層面を精査中に確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は全体に丸みを有する梢円形である。規模は、長径0.62m・短径0.42mを測る。
〔壁・底面〕 壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁20cm・西壁17cm・南壁17cm・北壁16cmを測る。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 アワズナがブロック状に混入した黒褐色土で区分できなかった。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

第3号土坑（SK-3）（図24）

〔位置と確認〕 本遺構は調査区西側で、グリッドD F・D G-98に位置している。第I層を精査中に確認した。西側は調査区域外のため遺構の全容は確認できなかった。

〔平面形・規模〕 平面形は側縁部が直線的で、端部が丸みを有する梢円形である。規模は、長径（2.98）m・短径1.26mを測る。

〔壁・底面〕 壁は上端から底面に傾斜している。壁高は、東壁60cm・西壁不明・南壁62cm・北壁68cmを測る。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 堆積土は4層に区分できた。第1・2層中には炭化物を含んでいる。断面観察等から自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

第4号土坑（SK-4）（図24）

〔位置と確認〕 本遺構は調査区西側で、グリッドD F-98に位置している。第III層を精査中に遺構を確認した。西側は調査区域外のため遺構の全容は確認できなかった。

〔平面形・規模〕 平面形は全体に丸みを有する梢円形である。規模は、長径1.14m・短径（0.58）mを測る。

〔壁・底面〕 壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁32cm・西壁不明・南壁46cm・北壁44cmを測る。底面は、やや起伏がみられる。

〔堆積土〕 堆積土は4層に区分できた。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

第5号土坑（SK-5） 欠番

第6号土坑（SK-6） 欠番

第7号土坑（SK-7）（図24）

〔位置と確認〕 本遺構は調査区東側の平坦面で、グリッドD N-103・104に位置している。第IV層面で遺構を確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は全体に丸みを有する梢円形である。規模は、長径1.02m・短径0.4mを測る。

〔壁・底面〕 壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁28cm・西壁22cm・南壁24cm・北壁27cmを測る。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 堆積土は3層に区分できた。褐色土及びローム土を混入しており、断面観察等から人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

第8号土坑（SK-8）（図25）

〔位置と確認〕 本遺構は調査区北側の緩斜面で、グリッドD H-108に位置している。第V層中で遺構を確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は側縁部が直線的で、端部が丸みを有する梢円形である。規模は、長径1.02m・短径0.54mを測る。

〔壁・底面〕 壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁14cm・西壁16cm・南壁17cm・北壁17cmを測る。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 堆積土は3層に区分できた。全体にローム土を混入している。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

第9号土坑（SK-9）（図25）

〔位置と確認〕 本遺構は調査区西側の緩斜面で、グリッドD F-101に位置している。

〔平面形・規模〕 平面形は全体に丸みを有する梢円形である。規模は、長径0.57m・短径0.42mを測る。

〔壁・底面〕 壁は北壁が底面から中端にかけて垂直に立ち上がり、上端にかけて広がる。他の壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁26cm・西壁22cm・南壁21cm・北壁27cmを測る。底面は断面が丸底を有する。

〔堆積土〕 堆積土は2層に区分できた。1・2層中ともにローム土を含んでいる。断面観察等から人為堆積と思われる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

第10号土坑（SK-10）（図25）

〔位置と確認〕 本遺構は調査区中央部の緩斜面で、グリッドD L-99に位置している。第III層を精査中に確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は側縁部が直線的で、端部が丸みを有する梢円形である。規模は、長径(0.6)m・短径0.42mを測る。

〔壁・底面〕 壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁18cm・西壁6cm・南壁不明・北壁8cmを測る。底面は鍋底状を呈する。

〔堆積土〕 堆積土は2層に区分できた。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

第11号土坑（SK-11）（図25）

〔位置と確認〕 本遺構は調査区中央部の緩斜面で、グリッドD K-98に位置している。第V層を精査中に確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は全体に丸みを有する円形である。規模は、長径0.94m・短径0.85mを測る。
〔壁・底面〕 壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁14cm・西壁12cm・南壁14cm・北壁14cmを測る。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 堆積土は2層に区分できた。断面観察等から自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

第12号土坑（SK-12）（図25）

〔位置と確認〕 本調査は調査区中央部の緩斜面で、グリッドD J-103・104に位置している。

〔平面形・規模〕 平面形は側縁部が中にえぐれる不整形を呈する。規模は、長径1.32m・短径0.88mを測る。

〔壁・底面〕 壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁27cm・西壁19cm・南壁24cm・北壁17cmを測る。底面は全体に起伏があり、軟弱な作りである。

〔堆積土〕 堆積土は3層に区分できた。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

第13号土坑（SK-13）（図25）

〔位置と確認〕 本調査は調査区北側の緩斜面で、グリッドD I-104に位置している。第IV層面を精査中に遺構を確認した。

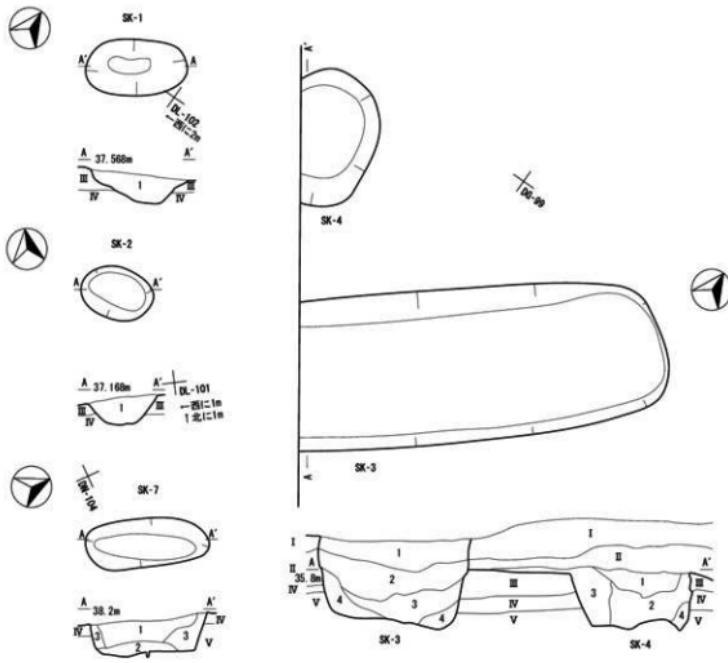
〔平面形・規模〕 平面形は全体に丸みを有する梢円形である。規模は、長径0.75m・短径0.44mを測る。

〔壁・底面〕 壁は東壁が底面から上端にかけて垂直に立ち上がり、他の壁は上端から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁15cm・西壁24cm・南壁16cm・北壁22cmを測る。底面は全体に起伏があり、軟弱な作りである。

〔堆積土〕 堆積土は3層に区分できた。全体にローム土が混入している。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

(成田)



0 S=1/40 1m

第1号土坑

1層 黒褐色土(10YR1.7/1)と黒褐色土(10YR2/2)の混合土 薄褐色土(10YR3/4)5%

第2号土坑

1層 黒褐色土(10YR2/2)と黒褐色土(10YR2/1)の混合土 アワズナブロック15%

第3号土坑

1層 黒色土 10YR1.7/1 硬化物(φ 5mm以上)3%、バミス(φ 1mm以下)2%
2層 噴褐色土 10YR2/4 黑褐色土(10YR1/6)15%、薄褐色土(10YR1.7/1)7%、硬化物中(φ 1mm以下)1%
3層 薄褐色土 10YR4/6 噴褐色土(10YR2/4)5%
4層 黒色土 10YR2/1 黑褐色土(10YR2/2)25%、褐色土(10YR4/6)7%

第4号土坑

1層 黒褐色土 T.5YR2/2 噴褐色土(10YR2/2)30%、硬化物(φ 5mm以下)7%、かたい土がブロック状に混入
2層 噴褐色土 T.5YR3/4 噴褐色土(10YR2/2)と噴褐色土(7.5YR3/1)20%のかたい土
3層 黑褐色土 10YR2/3 黑褐色土(10YR2/2)15%、褐色土(10YR4/7)7%
4層 噴褐色土 10YR3/4 喷褐色土(10YR4/4)25%、硬化物(φ 2mm以下)3%

第5号土坑

1層 黒褐色土(10YR2/3)と黒褐色土(10YR2/2)の混合土 噴褐色土(10YR3/4)10%、アワズナ5%
2層 噴褐色土 10YR3/4 黄褐色土(10YR5/0)30%、黒褐色土(10YR2/2)10%
3層 噴褐色土(10YR3/4)と黄褐色土(10YR5/8)の混合土 黑褐色土(10YR2/2)5%

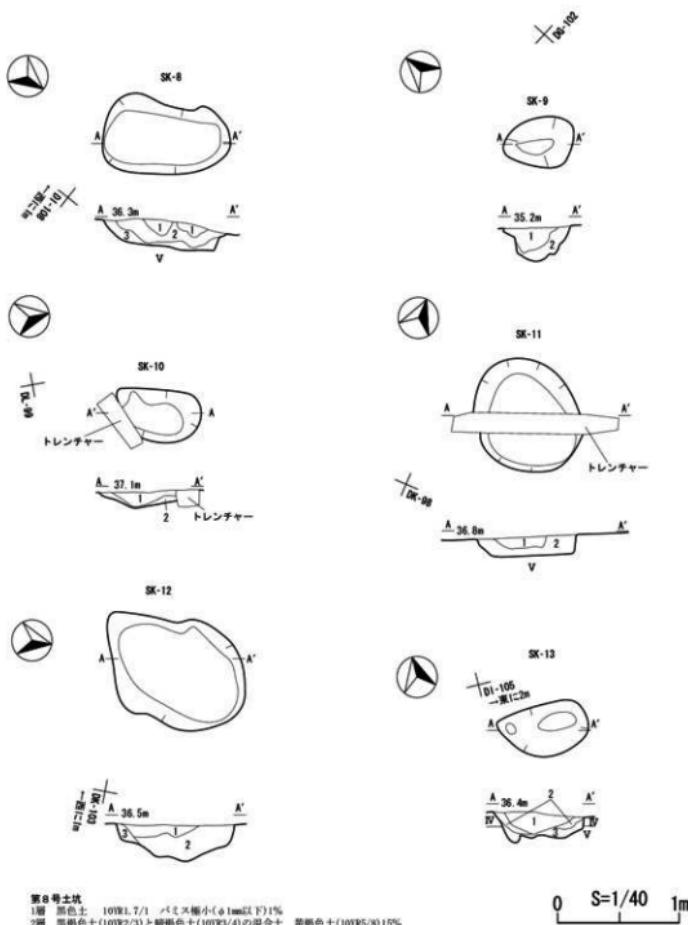
第6号土坑

1層 黒褐色土(10YR1.7/1)と暗褐色土(10YR3/3)の混合土 明褐色土(10YR6/6)3%、アワズナ1%
2層 黑褐色土 10YR2/3 明黃褐色土(10YR6/6)20%、黃褐色土(10YR7/8)5%、黒褐色土(10YR2/2)3%

第7号土坑

1層 黑褐色土 10YR2/2 暗褐色土(10YR3/4)10%、褐色土(10YR4/4)8%
2層 噴褐色土 10YR3/3 明黃褐色土(10YR6/6)20%、黃褐色土(10YR7/8)5%、黒褐色土(10YR2/2)3%
3層 黑褐色土(10YR2/3)と黄褐色土(10YR5/8)の混合土

図24 土坑(1)



第8号土坑
1層 黒色土 10YR1.7/1 バスミス細小(ϕ 1mm以下)1%
2層 黒褐色土(10YR2/3)と暗褐色土(10YR1/4)の混合土 黄褐色土(10YR5/8)15%
3層 黄褐色土(10YR5/8)

第9号土坑
1層 黑褐色土(10YR2/2) 明黄褐色土(10YR5/8)10%
2層 黑色土 10YR2/1 黑褐色土(10YR2/3)15%、明黄褐色土(10YR6/8)15%

第10号土坑
1層 黑色土 10YR2/2 黄褐色土(10YR5/8)10%
2層 褐色土(10YR4/4)と黄褐色土(10YR5/8)の混合土 黑褐色土(10YR3/3)3%

第11号土坑
1層 黑褐色土(10YR2/3)と褐色土(10YR4/6)の混合土 黑色土(10YR2/1)5%、浮石(ϕ 1~2mm)1%
2層 黄褐色土(10YR5/6)と暗褐色土(10YR3/4)の混合土 黑色土(10YR2/1)15%、浮石(ϕ 1~2mm)1%

第12号土坑
1層 黑褐色土(10YR2/1)と褐色土(10YR2/2)の混合土 黄褐色土(10YR5/8)10%
2層 黑褐色土 10YR2/3 浮石(ϕ 1~10mm)15%、黑色土がブロック状に混入
3層 暗褐色土(10YR3/4)と黄褐色土(10YR5/8)の混合土 黑褐色土(10YR2/3)3%

第13号土坑
1層 黑褐色土 10YR2/2 黑褐色土(10YR2/3)20%、黄褐色土(10YR5/8)10%
2層 暗褐色土 10YR3/3 浮石20%、黑褐色土混入
3層 褐色土 10YR4/4 全面にコームを含みブロック状に黒褐色土混入

図25 土坑(2)

2 溝状土坑

溝状土坑は4基検出した。

第1号溝状土坑（SV-1）（図26）

【位置と確認】本遺構は調査区東側の平坦面で、グリッドDN-100・101に位置している。第III層を精査中に梢円形の落ち込みを確認した。北側約5mに第2号溝状土坑を検出している。

【平面形・規模】平面形は側縁部が直線的で、両端部が丸みを有する梢円形の形態を呈する。規模は、開口部が長径3.64m・短径0.51m、坑底面が長径3.26m・短径0.12mを測る。

【壁・底面】壁は坑底面から上端にかけて立ち上がり、開口部に向かって広がる。壁高は、東壁96cm・西壁92cm・南壁97cm・北壁91cmを測る。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】堆積土は3層に区分できた。第3層中にローム土が混入している。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

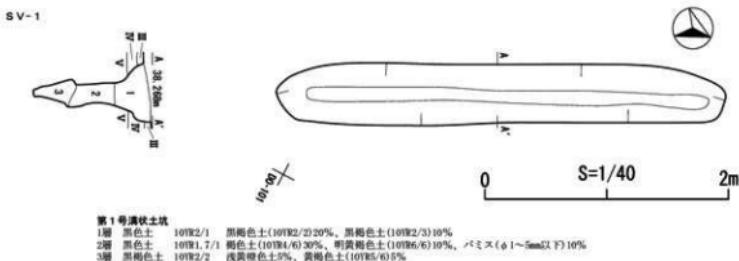


図26 第1号溝状土坑

第2号溝状土坑（SV-2）（図27）

【位置と確認】本遺構は調査区東側の平坦面で、グリッドDN-103・104に位置している。第IV層を精査中に梢円形の落ち込みを確認した。北側に第3号溝状土坑、南側に第1号溝状土坑を検出した。

【平面形・規模】平面形は側縁部から弧状を呈し端部に丸みを呈する形態である。規模は、開口部が長径3.65m・短径0.47m、坑底面が長径3.76m・短径0.09mを測る。

【壁・底面】壁は東・西壁が坑底面から上端にかけて垂直に立ち上がり、上端から開口部にかけて広

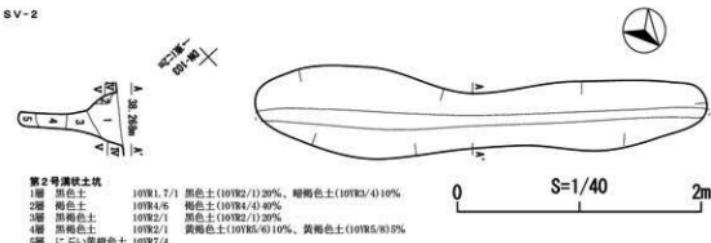


図27 第2号溝状土坑

がる。南・北壁は開口部から坑底面にかけて内部に傾斜している。壁高は、東壁80cm・西壁76cm・南壁84cm・北壁77cmを測る。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】 堆積土は5層に区分できた。第4・5層の覆土下位の堆積土はローム土を主体とした堆積土である。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

第3号溝状土坑（SV-3）（図28）

【位置と確認】 本遺構は調査区東側の平坦面で、グリッドD L-104・105に位置している。第IV層を精査中に梢円形の落ち込みと南側に風倒木を確認した。風倒木との新旧関係は本遺構が古い。

【平面形・規模】 平面形は側縁部が直線的で、端部が丸みを有する梢円形で、形態は第1号溝状土坑と類似している。規模は、開口部が長径（3.04）m・短径0.44m、坑底面が長径3.22m・短径0.15mを測る。

【壁・底面】 壁は開口部が坑底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁75cm・西壁72cm・南壁99cm・北壁60cmを測る。底面は、ほぼ平坦である。

【堆積土】 堆積土は4層に区分できた。第4層は壁面の崩落土と考えられる。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

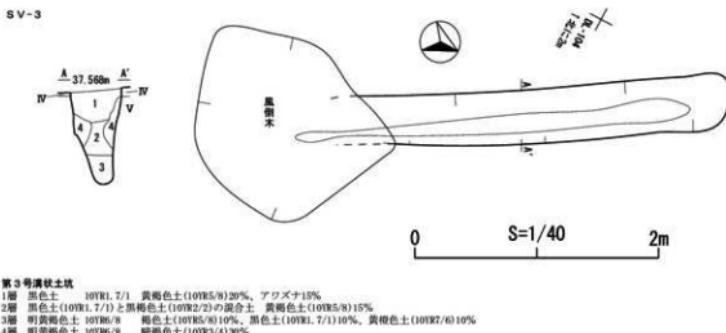


図28 第3号溝状土坑

第4号溝状土坑（S V-4）（図29）

【位置と確認】本遺構は調査区の南側で、グリッドDN・DO-94に位置している。第V層を精査中に梢円形の落ち込みを確認した。

【平面形・規模】平面形は西側縁が直線的で、端部が丸みを有する梢円形である。規模は、開口部が長径2.72m・短径0.26m、坑底面が長径2.8m・短径0.1mを測る。

【壁・底面】壁は開口部から底面にかけて傾斜している。壁高は、東壁35cm・西壁30cm・南壁40cm・北壁42cmを測る。

【堆積土】堆積土は3層に区分できた。第1・2層はローム土を全面に含んでいる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

(成田)

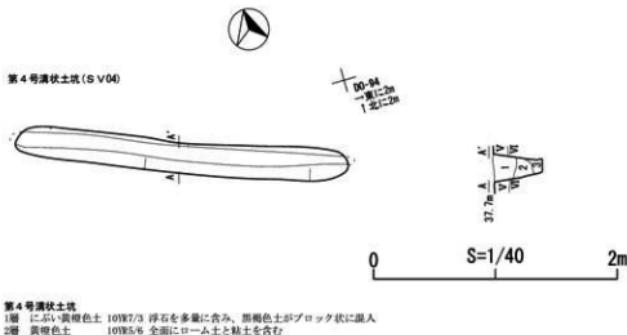


図29 第4号溝状土坑

3 溝跡

本遺構から溝は1基検出した。

第1号溝跡 (S D - 1) (図30)

【位置と確認】本遺構は調査区の南側の緩斜面で、グリッドD O-92、D P・D Q-93に位置している。第1層を除去後に溝を確認した。

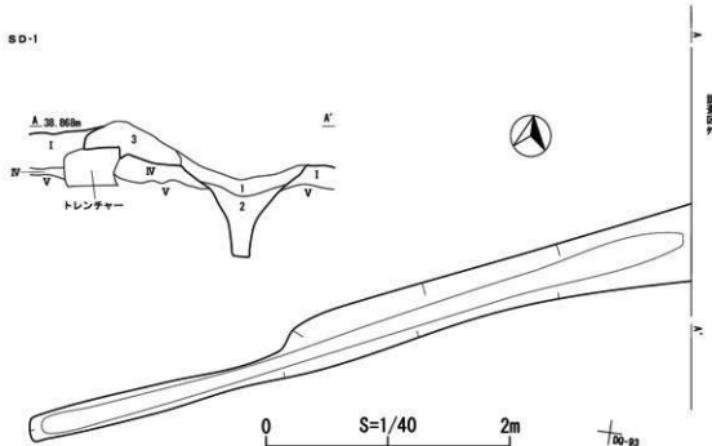
【平面形・規模】東側から西側にかけて幅が狭くなる形態である。規模は、開口部が長径(5.6)m・短径0.4m、坑底面が長径(5.34)m・短径0.15mを測る。

【壁・底面】壁は底面から垂直に立ち上がり、開口部にかけて広がる。壁高は、東壁62cm・西壁89cm・南壁62cm・北壁68cmを測る。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】堆積土は溝の内部が2層に区分できた。第3層は溝の北側にあり、溝を掘削した際に盛土したものと考えられる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

(成田)



第1号溝跡
1層 黒褐色土 7.5YR2/2 黑褐色土(10YR2/3)20%、暗褐色土(10YR3/2)20%、黃褐色土(10YR5/1)10%
2層 暗褐色土 10YR3/4 黑褐色土(10YR2/3)30%、明黃褐色土(10YR6/4)10%、黃褐色土(10YR5/8)10%
3層 黃褐色土 10YR5/8 明黃褐色土(10YR6/6)20%、黑褐色土(10YR2/2)10%

図30 第1号溝跡

4 ピット群（図31）

本遺跡からは23個のピットを検出したが、ピット群として報告する。

【位置と確認】本調査区の北側緩斜面で、グリッドD L-109～111、DH・DI-109に位置している。第IV層を精査中に確認した。

【分布】P 1～P 21は、斜面に長さ7mで検出しており、グリッドD L-111を中心に2列に配置している。P 22・23は、P 1～P 21の西側8mで対で検出した。

【形態・規模】形態は、円形・梢円形・不整形であり、円形が主体をしめる。規模は30cm内外の大きさが多い。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【小結】本遺構の性格及び用途であるが、遺物が出土せず時期が明確ではないが、ピット内の堆積土が第I層の黒色土と類似しており、時期的には近世及び近代の時期の可能性が高い遺構である。直列状に位置していることから、放牧の柵の可能性も考えられるが、断定はできない。

(成田)

第2節 遺構外出土遺物

1 土器（図32-1～16）

土器はDH-100・101を中心として約10m以内の範囲に散在して出土し、総剥片数65点が出土した。1・2は、口縁部破片であり、同一個体と思われる深鉢形である横位沈線を巡して区画帯を構成し、4条を一単位とした稚拙な山形状文様を施文している。3～9は、胴部破片であり節の細かい単節を用いている。10～14は、胴部破片で撚糸文を施文し、15は深縁形胴部の無文土器である、16は、平底で底部寄りに綱文を施文している深鉢形土器である。

2 石器（図32-17～21）

石器は剥片石器が3点、礫石器が2点出土した。

剥片石器（17～19）は、一部に調整剥離がみられる不定形石器である、石質は頁岩である。

礫石器（20・21）は、片面に一部スリがみられるものであり、安山岩を使用している、21は一部欠損している。

(成田)

太田(2)道路

ピット群

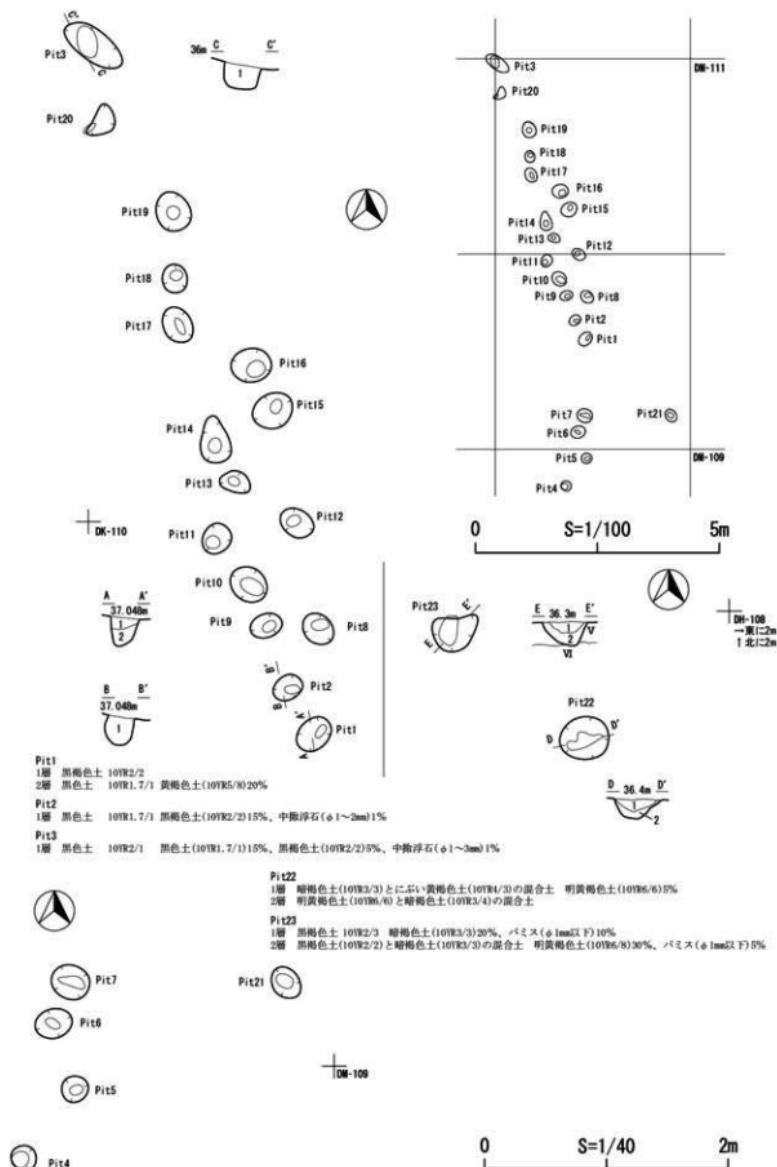


図31 ピット群

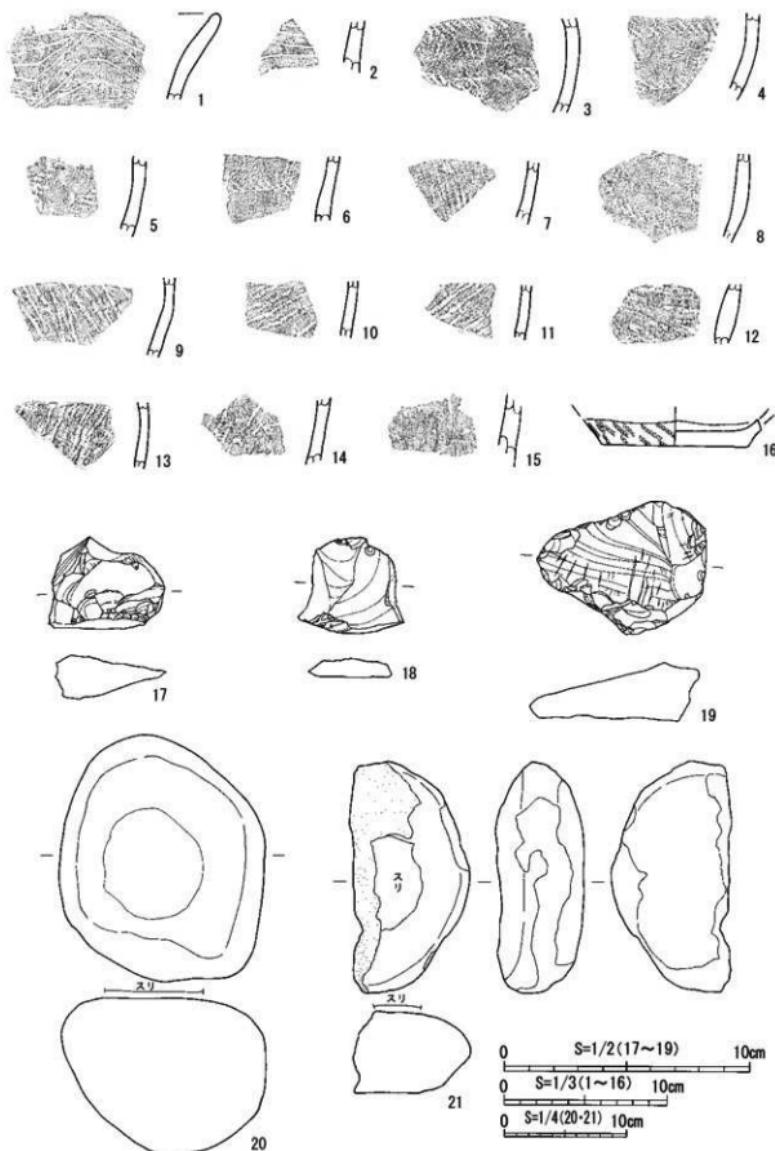


図32 遺構外出土遺物

第3章　まとめ

調査は、平成18年度の確認調査の結果を受けて、2,800m²の本調査を実施した。調査の結果、土坑23基・溝状土坑4基・溝1基・ピット群1基の計29基を検出した。土坑は、形態が円形・不整形を呈しており、遺構内からの遺物は出土しなかったために、明確な時期を決定することができなかった。堆積土は自然堆積によるものが多く占める。

溝状土坑は、調査区東側の標高約37mの近辺から多く検出し、その長軸方向は南北を示す。西側に向かって小谷が存在するため、小谷に向かう獲物を捕獲するために本遺構を設置した可能性が高い。溝は第I層中を掘り込んで構築しており、近代の排水溝と考えられる。ピット群は、堆積土中に第I層土を混入している。時代及び時期を明確にすることはできなかったが、近世・近代の時期の柵列とも考えられる。

出土遺物は、すべて遺構外からの出土であり、グリッドDH-100・101の調査区西側の第II層中からの出土が多い、図32-15の無文土器を除き、土器の製作・文様の施文等から弥生時代の土器と考えられるものである。石器は、剥片石器及び礫石器が出土し、土器の時期に製作され使用したものと考えられる。

今回の報告は、限られた道路幅という制約された地区であり、遺跡の全体像を把握することは難しいが、当地区的南及び北側丘陵地区からは何ら遺物が出土しておらず、また、東側の丘陵区も集落の存在があるかどうか難しい状況である。このことから判断すると、小谷に向かう獲物を捕獲する狩猟場的な性格を有する遺跡と考えられる。

(成田)

倉越(2)遺跡

第24号住居跡

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図5-1	壤土	土師器	壺	口縁部	+++, ハラクス	ハラクス	

第33号住居跡

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図6-1	壤土	土師器	壺	口縁～底部	ヨコナフ	ハラクス	内面黒色処理
図6-2	壤土	土師器	小型壺	口縁～底部	ハラクス	ハラクス	

第35号住居跡

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図9-1	床面	土師器	壺	底部	ヨコナフ	ヨコナフ	
図9-4	3層	土師器	壺	底部	ハラクス	ハラクス	
図9-5	2, 3層	土師器	壺	口縁～脚部	ハラクス	ハラクス	
図9-6	2, 3層	土師器	壺	口縁～脚部	ハラクス	ハラクス	
図10-7	SIK1層, SE 2層, 3層	土師器	壺	脚～底部	ハラクス	ハラクス	
図10-8	1層, 2層	土師器	壺	脚～底部	ハラクス	ハラクス	
図10-9	2層	須惠器	壺	脚部	平行ヨリ	ハラクス	
図10-10	2層	須惠器	壺	格子ヨリ	++	++	

図番号	層位	種別	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
図9-2	床面	鉄製品	刀子	長さ17.5 幅2.2 厚さ0.5	77.8	
図9-3	ヨリ 支脚	土製品	羽口	長さ24.8 幅11.7 孔径3.4	1,840.0 欠損品	

図番号	層位	種別	石質	法量(cm)	重量(g)	備考
図10-11	3層	石器	敲磨形類	閃綠岩	長さ8.4 幅2.2 厚さ4.6	513.5 X
図10-12	3層	石器	敲磨形類	閃灰岩	長さ10.5 幅9.4 厚さ3.8	431.8 一部欠損, 穴付
図10-13	2層	石器	敲磨形類	透紋岩	長さ6.1 幅4.0 厚さ3.4	90.3 一部欠損, X
図10-14	2層	石器	敲磨形類	安山岩	長さ16.4 幅11.4 厚さ7.0	1,345.6 X

第36号住居跡

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図11-1	2層	土師器	壺	口縁～底部	ヨコナフ	ヨコナフ	
図11-2	1層	土師器	壺	口縁～底部	ヨコナフ	ヨコナフ	
図11-3	1層	土師器	壺	口縁～底部	ヨコナフ	ヨコナフ	X付着跡
図12-4	10層	土師器	壺	口縁～底部	ヨコナフ	ヨコナフ	
図12-5	1層	土師器	壺	口縁～底部	ヨコナフ	ヨコナフ	
図12-6	1層, 2層, 3層	土師器	壺	脚～底部	++	++	砂底
図12-7	1層, 2層	土師器	壺	口縁部	++	++	
図12-8	1層	土師器	壺	口縁部	ヨコナフ	ヨコナフ	
図12-9	1層, 3層	土師器	壺	口縁部	口縁部ヨリ	口縁部ヨリ	
図12-10	ヨリ, 1層, 3層	土師器	壺	口縁部	脚部ヨリ	脚部ヨリ	
図12-11	10層	土師器	壺	口縁部	ヨコナフ	ヨコナフ	
図12-12	1層, 2層	土師器	壺	口縁部	ヨコナフ	ヨコナフ	
図12-14	3層	土師器	壺	口縁部	口縁部ヨリ	口縁部ヨリ	
図12-17	1層, 2層, 3層	須恵器	壺	脚部	ヨコナフ	ヨコナフ	

図番号	層位	種別	器種	法量(cm)	備考
図12-13	6層	木製品	輪?	長さ13.2 幅7.3 厚2.1	

図番号	層位	種別	器種	法量(cm)	重量(g)	備考
図12-18	1層上面	鐵貨	寛永通宝	長さ2.5 幅4.5 厚0.1	3.6	

図番号	層位	種別	器種	石質	法量(cm)	重量(g)	備考
図12-15	6層	不定形石器	軽石	長さ6.5 幅4.8 厚さ2.2	28.7		
図12-16	10層	不定形石器	透明白石	長さ4.1 幅4.4 厚さ1.0	12.9		

第37号住居跡

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図13-1	1層	土師器	壺	口縁～底部	ヨコナフ	ヨコナフ → ハラクス	

第38号住居跡

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図15-1	ヨリ, 2層, 2層, 肥土	土師器	壺	口縁～脚部	ハラクス	ハラクス	X状炭化物
図15-2	ヨリ, 2層	土師器	壺	口縁～脚部	+++, ハラクス	ハラクス	
図15-3	床面, 2層, 日盤	土師器	壺	口縁～脚部	+++, ハラクス	ハラクス	
図15-4	ヨリ, 2層	土師器	小型壺	口縁～底部	ハラクス	ハラクス	底面に木板痕
図15-5	ヨリ, 2層	土師器	壺	口縁～底部	ヨコナフ	ヨコナフ	

図番号	層位	種別	器種	石質	法量(cm)	重量(g)	備考
図15-6	床面	石器	敲磨形類	軽石	長さ7.7 幅6.2 厚さ6.2	360.0 X	
図15-7	壤土	石器	敲磨形類	軽石	長さ(8.4) 幅6.5 厚さ5.4	440.0 一部欠損	
図15-8	床面	石器	透明白石	透明白石	長さ32.0 幅28.0 厚さ9.0	14,600.0 X	
図15-9	壤土	石器	石墨	石墨	長さ17.8 幅15.7 厚さ6.5	2,180.0 一部欠損, Xとヨリ	

第62号土坑

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
図16-1	1層	縄文土器	深鉢	脚部	縄文LR		
図16-2	1層	縄文土器	深鉢	脚部	縄文LR		

第64号土坑

図番号	層位	種別	器種	石質	法量(cm)	重量(g)	備考
[B18-3]	1層確認面	石器	帆石	新灰岩	長さ8.6 幅7.6 厚さ4.6	328.7	一部欠損、X

第68号土坑

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
[B18-4]	1層	土師器	环	底部	ヨコナリ	ヨコナリ	

第72号土坑

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
[B18-5]	1層	調文土器	陶鉢	胴部	調文RL		

第77号土坑

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
[B18-6]	1層	土師器	环	口縁-底部	ヨコナリ	ヨコナリ	
[B18-7]	1層	土師器	环	底部	ヨコナリ	ヨコナリ	
[B18-8]	1層	土師器	高台环	底部	ヨコナリ	ヨコナリ	接合痕あり

第14号柱穴

図番号	層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
[B20-1]	1層	調文土器	深鉢	胴部	調文RL		外面にX状質化物付着

遺構外

図番号	グリッド・層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
[B21-1]	NG-165-166・II層	調文土器	深鉢	底部(平底)	調文LR		
[B21-2]	VC-165・I層	調文土器	深鉢	底部(平底)	調文LR		内部にX状質化物付着
[B21-3]	VC-166・II層	調文土器	深鉢	底部(平底)	調文LR		
[B21-4]	VC-163・I層	調文土器	深鉢	口縁部(平口縁)	調文RL		
[B21-5]	VP-168・II層	調文土器	深鉢	口縁部	調文LR		
[B21-6]	VG-168・II層	調文土器	深鉢	口縁部(平口縁)	調文LR		
[B21-7]	VS-168・II層	表探	調文土器	深鉢	口縁部(平口縁)	調文LR	(特科の基(?)が混入)
[B21-8]	VG-165-166・II層	調文土器	深鉢	胴部	調文LR		外面にX状質化物付着
[B21-9]	VG-168・II層	調文土器	深鉢	胴部	調文LR		
[B21-10]	VD-168・II層	調文土器	深鉢	胴部	調文LR		
[B21-11]	VG-168・II層	調文土器	深鉢	胴部	調文LR		内部にX状質化物付着
[B21-12]	VD-168・II層	調文土器	深鉢	胴部	調文LR		
[B21-13]	VG-169・II層	調文土器	深鉢	胴部	調文LR		
[B21-22]	VS-169・II層	表探	土師器	ヨコ	ヨコナリ	ヨコナリ	
[B21-23]	VS-169・I層	表探	土師器	ヨコ	ヨコナリ	ヨコナリ	
[B21-24]	VS-169・II層	表探	土師器	ヨコ	ヨコナリ	ヨコナリ	
[B21-25]	VS-169・I層	表探	土師器	ヨコ	格子縫合	ナシ	

図番号	層位	種別	器種	石質	法量(cm)	重量(g)	備考
[B21-14]	土製品	近世土人形			長さ4.1 幅2.2 厚さ1.0	7.0	

図番号	グリッド・層位	種別	器種	石質	法量(cm)	重量(g)	備考
[B21-15]	NG-165-166・II層	石器	戴帽部類	安山岩	長さ12.0 幅9.5 厚さ5.5	943.7	X
[B21-16]	VC-168・I層	石器	戴帽部類	ナメイ	長さ8.2 幅6.1 厚さ3.9	45.7	少々
[B21-17]	VF-168・IV層	石器	石製品	新灰岩	長さ2.3 幅1.9 厚さ0.4	1.8	一部欠損、中央部に穿孔
[B21-18]	VF-164・I層	石器	不定形石器	珪質頁岩	長さ2.6 幅3.0 厚さ0.7	4.9	
[B21-19]	VF-164・I層	石器	不定形石器	珪質頁岩	長さ5.8 幅2.5 厚さ0.9	12.4	
[B21-20]	VF-168・II層	石器	不定形石器	珪質頁岩	長さ3.4 幅4.6 厚さ0.8	10.9	
[B21-21]	VF-169・II層	石器	不定形石器	珪質頁岩	長さ3.3 幅4.0 厚さ1.0	8.7	

太田(2)遺跡

遺構外

図番号	グリッド・層位	種別	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
[B32-1]	DJ-103・I層	調文土器	深鉢	口縁部	横位弦文の区画に山形状文様(沈微)		
[B32-2]	DH-101・II層	調文土器	深鉢	口縁部	横位・斜位文様(沈微)		
[B32-3]	DI-100・II層	調文土器	深鉢	胴部	二段の調文(RL)		
[B32-4]	DI-100・II層	調文土器	深鉢	胴部	二段の調文(RL)		
[B32-5]	DH-100・II層	調文土器	深鉢	胴部	調文(RL)		
[B32-6]	DI-100・II層	調文土器	深鉢	胴部	回転方向を変えた調文(RL)		
[B32-7]	DI-100・II層	調文土器	深鉢	胴部	調文(RL)		
[B32-8]	DI-100・II層	調文土器	深鉢	胴部	回転方向を変えた調文(RL)		
[B32-9]	DH-101・I層	調文土器	深鉢	胴部	調文(LR)		
[B32-10]	DI-100・II層	調文土器	深鉢	胴部	燃え文(R)		
[B32-11]	DH-100・II層	調文土器	深鉢	胴部	燃え文(R)		
[B32-12]	DH-101・II層	調文土器	深鉢	口縁部	燃え文(L)		
[B32-13]	DH-100・II層	調文土器	深鉢	胴部	燃え文(L)		
[B32-14]	DG-101・II層	調文土器	深鉢	胴部	燃え文(L)		
[B32-15]	DO-95・I層	調文土器	深鉢	胴部	無文		
[B32-16]	DH-101・II層	調文土器	深鉢	底部	調文(RL)		

図番号	グリッド・層位	種別	器種	石質	法量(cm)	重量(g)	備考
[B32-17]	DG-100・II層	石器	不定形石器	頁岩	長さ4.6 幅3.8 厚さ1.8	26.3	
[B32-18]	DH-101・II層	石器	不定形石器	頁岩	長さ3.9 幅3.3 厚さ0.7	15.7	
[B32-19]	DJ-103・II層	石器	不定形石器	頁岩	長さ6.9 幅5.2 厚さ2.3	97.0	
[B32-20]	BI-100・II層	石器	戴帽部類	安山岩	長さ16.7 幅14.2 厚さ10.5	2,602.0	
[B32-21]	DG-100・II層	石器	戴帽部類	安山岩	長さ(15.7)幅(8.0)厚さ(5.5)	(550.0)	

第4編 自然科学分析

第1章 放射性炭素年代測定（AMS測定）

(株) 加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

倉越(2)遺跡は、青森県上北郡七戸町字倉越（北緯 $40^{\circ} 42' 11''$ 、東経 $141^{\circ} 09' 46''$ ）に所在する。

(2) 測定の意義

堅穴住居の年代および集落の継続期間を明らかにしたい。

(3) 測定対象試料

測定対象試料は、34号住居跡（SI-34）の4層から出土した木炭（07KURAKOSHI-SI34-38 : IAAA-71789）、75号土坑（SK-75）の1層から出土した木炭（07KURAKOSHI-SK75-18 : IAAA-71790）、合計2点である。

(4) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。
最初の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(5) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹⁴C/¹³Cの測定も同時に行う。

(6) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

- 2) BP年代値は、過去において大気中の¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る¹⁴C年代である。
- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。
複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。
- 4) $\delta^{14}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。
 $\delta^{13}\text{C}$ をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰ ; パーミル) で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_S - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1) \square$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_S - {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2) \square$$

ここで、 ${}^{14}\text{A}_S$: 試料炭素の¹⁴C濃度 : (¹⁴C/¹²C)_Sまたは(¹⁴C/¹³C)_S

${}^{14}\text{A}_R$: 標準現代炭素の¹⁴C濃度 : (¹⁴C/¹²C)_Rまたは(¹⁴C/¹³C)_R

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の¹³C濃度 (¹³A_S=¹³C/¹²C) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に¹³C/¹²Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に「加速器」と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの¹⁴C濃度 (¹⁴A_S) に換算した上で計算した値である。(1)式の¹⁴C濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_N = {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき}) \square$$

または□

$$= {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{を使用するとき}) \square$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_N - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (\%) \square$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

¹⁴C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\%) \square$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \quad (\%) \square$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age ; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1] \quad \square$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100) \quad \square$$

5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv3.10較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

(7) 測定結果

SI-34から出土した木炭 (07KURAKOSHI-SI34-38 : IAAA-71789) の ^{14}C 年代が 1420 ± 40 yrBP、SK-75から出土した木炭 (07KURAKOSHI-SK75-18 : IAAA-71790) の ^{14}C 年代が 31770 ± 190 yrBPである。

暦年較正年代 ($1\sigma = 68.2\%$) は、SI-34出土の木炭が605~655AD、SK-75出土の木炭が30020~29620BCである。SK-75出土の木炭の年代は、土坑から出土した遺物との年代観とは対応しない。土坑底面出土試料であることから、掘り込まれた地層中の木炭であった可能性を検討する必要がある。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAA Code No.	試 料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-71789 #2002-1	試料採取場所 : 青森県上北郡七戸町字倉越 倉越(2)遺跡 試料形態 : 木炭 試料名(番号) : 07KURAKOSHI-SI34-38	Libby Age(yrBP) : 1,420 ± 40 $\delta^{13}\text{C}(\text{\%})$ 、(加速器) = -23.44 ± 0.58 $\Delta^{14}\text{C}(\text{\%})$ = -161.8 ± 3.6 pMC(%) = 83.82 ± 0.36
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}(\text{\%})$ = -159.2 ± 3.5 pMC(%) = 84.08 ± 0.35
		Age (yrBP) : 1,390 ± 30
IAAA-71790 #2002-2	試料採取場所 : 青森県上北郡七戸町字倉越 倉越(2)遺跡 試料形態 : 木炭 試料名(番号) : 07KURAKOSHI-SK75-18	Libby Age(yrBP) : 31,770 ± 190 $\delta^{13}\text{C}(\text{\%})$ 、(加速器) = -24.22 ± 0.86 $\Delta^{14}\text{C}(\text{\%})$ = -980.8 ± 0.4 pMC(%) = 1.92 ± 0.04
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}(\text{\%})$ = -980.8 ± 0.4 pMC(%) = 1.92 ± 0.04
		Age (yrBP) : 31,760 ± 190

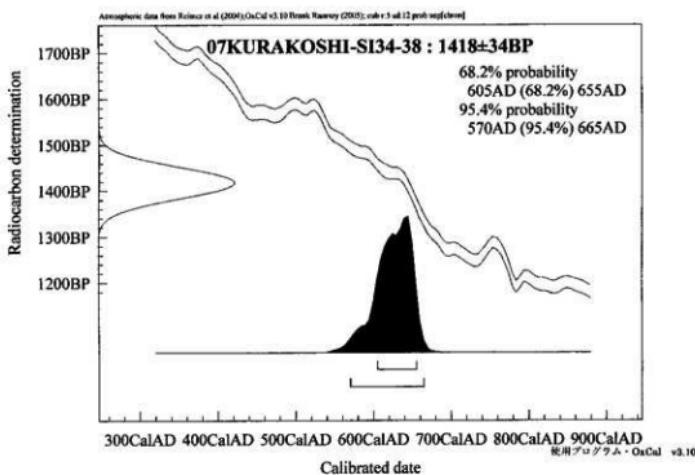
参考資料:暦年較正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age(yrBP)
IAAA-71789	07KURAKOSHI-SI34-38	1418 ± 34
IAAA-71790	07KURAKOSHI-SK75-18	31767 ± 190

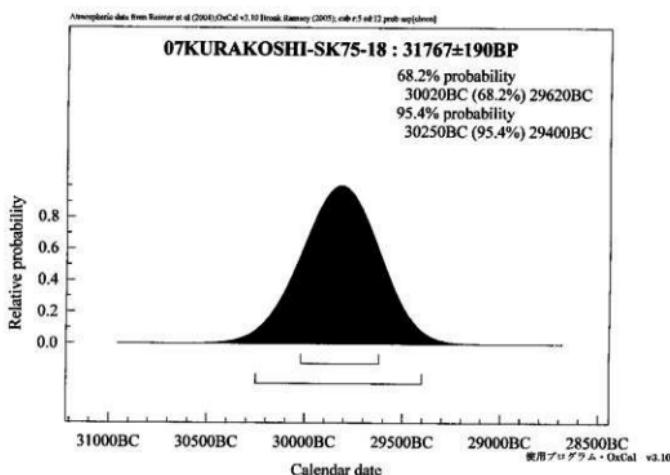
ここに記載する Libby Age (年代値) と誤差は下1桁を丸めない値です。

試料番号	IAA Code No.	前処理方法	試料状態	処理前試料量	回収炭量	燃焼量	粗製炭量	$\delta^{13}\text{C}(\text{\%})$ (加速器)	Libby Age (yrBP)	(yrBP+丸め込みなし)	暦年較正1σ (yrcaalBP)	暦年較正2σ (yrcaalBP)
07KURAKOSHI-SI34-38	IAAA-71789	AAA法 やや 温	95.66mg	8.08mg	4.60mg	3.12mg	-23.44 ± 0.58	1420 ± 40	1418 ± 34	605-655AD (68.2%)	570-665 (95.4%)	
07KURAKOSHI-SK75-18	IAAA-71790	AAA法 やや 温	94.56mg	20.69mg	3.05mg	1.98mg	-24.22 ± 0.86	31770 ± 190	31767 ± 190	30020-	30250-	29400BC (95.4%)

【参考値：曆年較正 Radiocarbon determination】



【参考値：曆年較正 Radiocarbon determination】



写 真 図 版



2007年調査区全景 N→



2007年調査風景



2007年調査風景



2007年調査風景



2008年調査区全景 W→



2007年調査区全景 E→

写真1 倉越(2)遺跡調査全景・調査風景



2007年調査区沢 W→



2007年調査区沢セクション N→



2007年調査区沢 W→



2007年調査区遠景 S→



2008年調査風景 W→



2008年調査区全景 W→

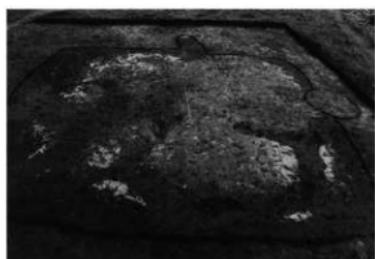
写真2 倉越(2)遺跡遠景・調査風景



第24号竪穴住居跡 完掘 S→



第33号竪穴住居跡 完掘 W→



第34号竪穴住居跡 確認面 S→



第34号竪穴住居跡 炭化材検出状況 S→



第34号竪穴住居跡 完掘 S→



第34号竪穴住居跡 北側ピット確認 E→



第34号竪穴住居跡 カマド完掘 S→



第34号竪穴住居跡 カマドA Bセクション W→

写真3 倉越(2)遺跡竪穴住居跡(1)



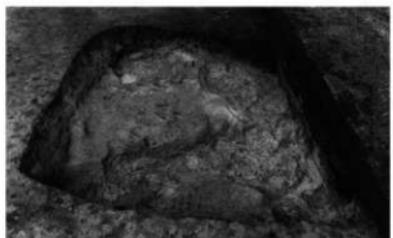
第35号竪穴住居跡 遺物出土状況 S→



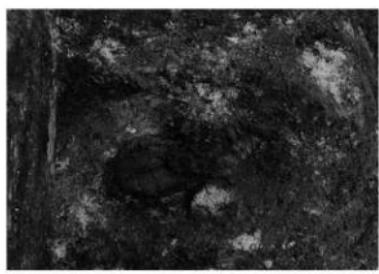
第35号竪穴住居跡 完掘 E→



第36号竪穴住居跡 遺物出土状況 E→



第36号竪穴住居跡 完掘 W→



第37号竪穴住居跡 木製品出土状況 E→

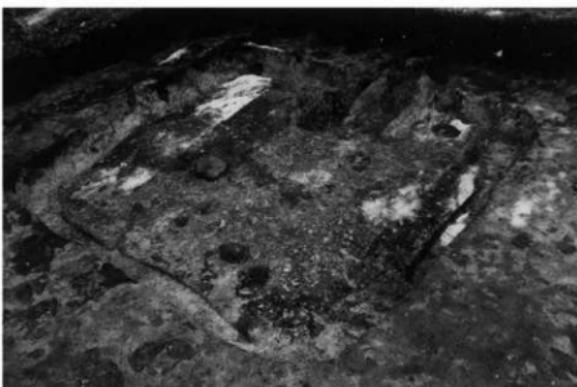


第37号竪穴住居跡 完掘 S→

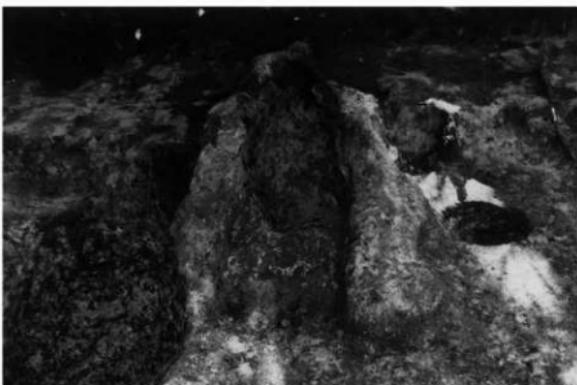


第37号竪穴住居跡 東西セクション S→

写真4 倉越(2)遺跡竪穴住居跡(2)



第38号竪穴住居跡 完掘 N→

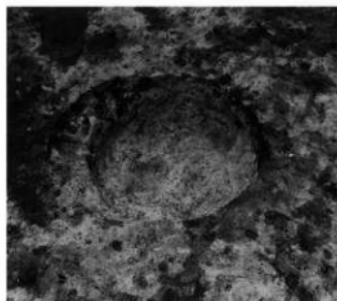


第38号竪穴住居跡 カマド完掘 N→

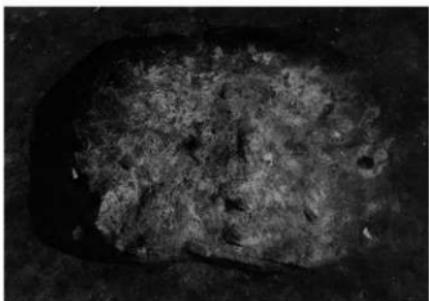


第38号竪穴住居跡 E→

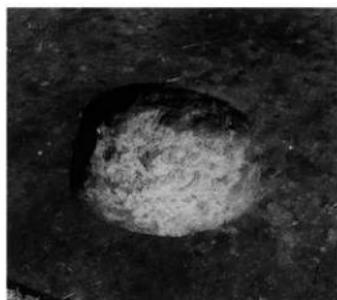
写真5 倉越(2)遺跡竪穴住居跡(3)



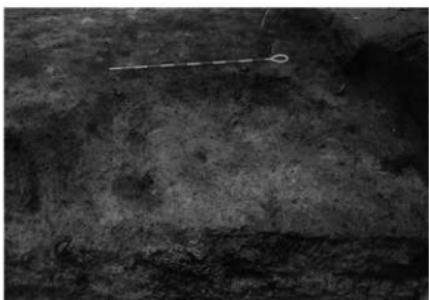
第60号土坑 完掘 E→



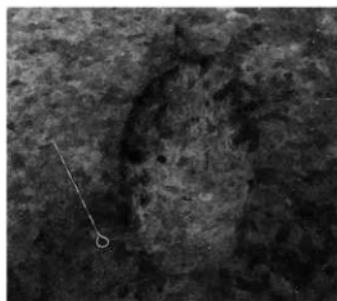
第61号土坑 完掘 S→



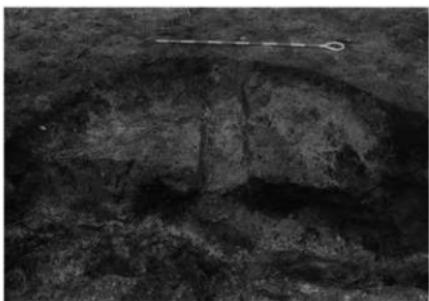
第62号土坑 完掘 E→



第66号土坑 完掘 N→

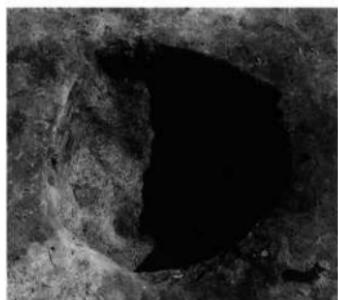


第69号土坑 完掘 S→

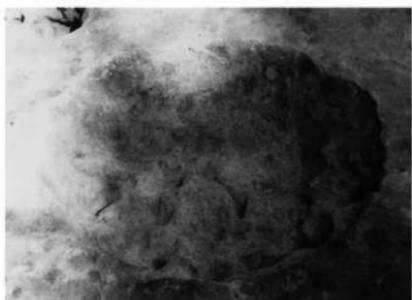


第67号土坑 完掘 N→

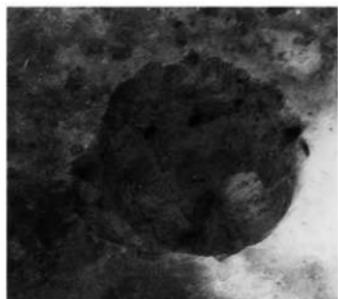
写真6 倉越(2)遺跡土坑(1)



第72号土坑 完掘 N→



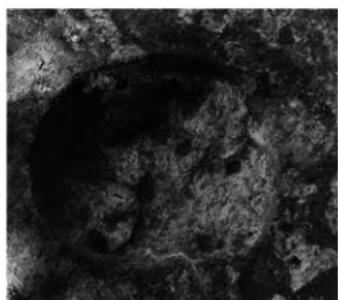
第68号土坑 完掘 S→



第71号土坑 完掘 N→



第71号土坑 セクション W→

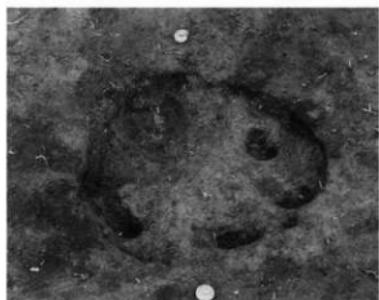


第73号土坑 完掘 S→



第73号土坑 セクション E→

写真7 倉越(2)遺跡土坑(2)



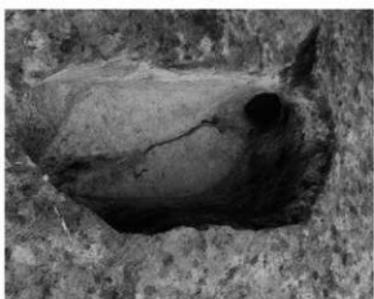
第74号土坑 完掘 N→



第80号土坑 完掘 N→



第75号土坑 炭化材出土状況 E→



第75号土坑 完掘 E→



第17号溝状土坑 完掘 S→



第17号溝状土坑 セクション S→

写真8 倉越(2)遺跡土坑(3)・溝状土坑



第1号溝跡 完掘 N→



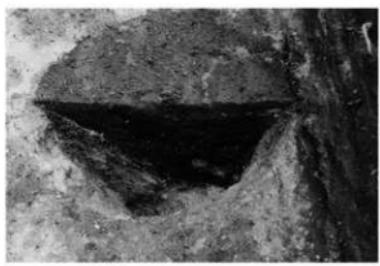
調査区南東ピット群確認 S N→



ピット群ピット2 セクション E→



ピット群ピット2 完掘 S→



ピット群ピット5 セクション E→



ピット群ピット6 完掘 S→

写真9 倉越(2)遺跡溝跡・ピット群(1)



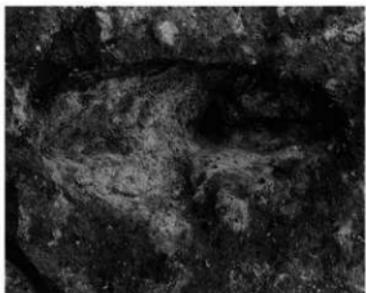
ピット群ピット3 セクション E→



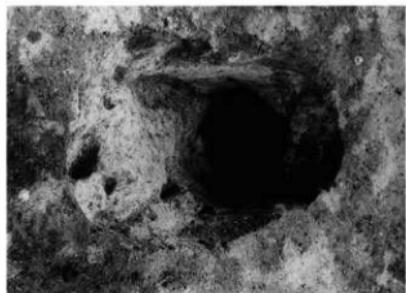
ピット群ピット3 完掘 E→



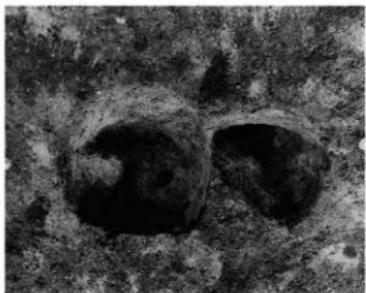
ピット群ピット4 S→



ピット群ピット13 S→



ピット群ピット14 E→



ピット群ピット7・8 E→

写真10 倉越(2)遺跡ピット群(2)



写真11 倉越(2)遺跡竪穴居跡出土遺物(1)

36住



1



2



3



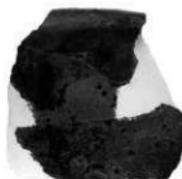
4



5



6



7



8



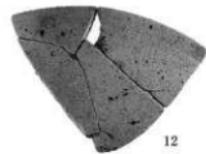
9



10



11



12



13



14



15



16



17

37住



18

38住



19

写真12 倉越(2)遺跡竪穴居跡出土物(2)

38住



1



2



3



4



5



6



7

62土



9



10

64土



11

68土



12

72土



13



14

77土



15



16

ピット14



17

遺構外



18



19



20

写真13 倉越(2)遺跡堅穴住居跡(3)・土坑・ピット群・遺構外出土遺物(1)

遺構外

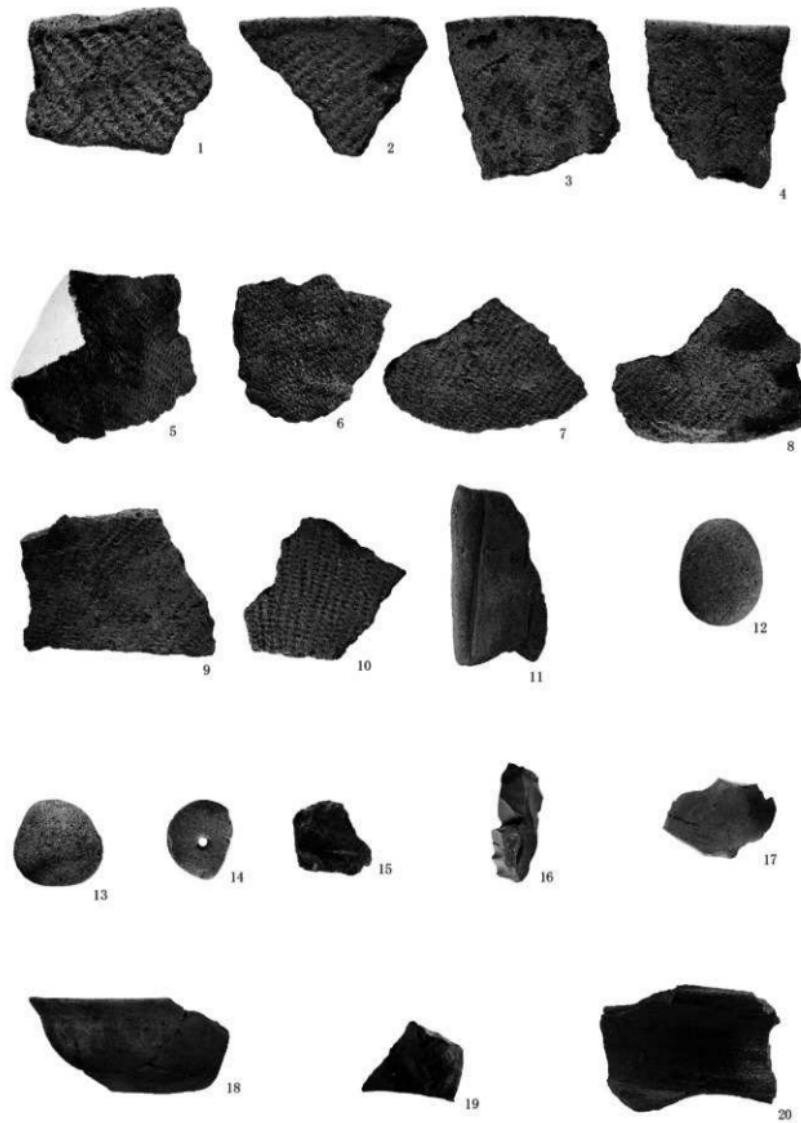


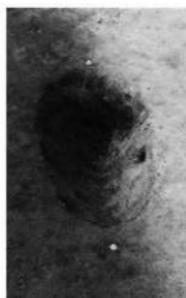
写真14 倉越(2)遺跡遺構外出土遺物(2)



遺跡遠景 S→



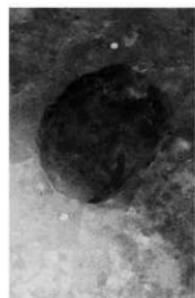
DH・DI-100グリッドII層 S→



第1号土坑 完掘 E→



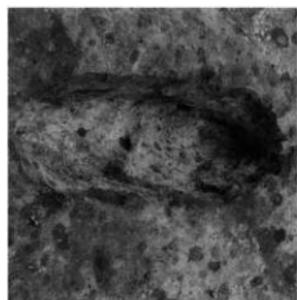
第4号土坑 完掘 E→



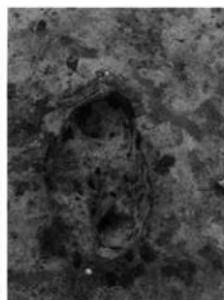
第2号土坑 完掘 W→



第3号土坑 完掘 E→



第7号土坑 完掘 N→

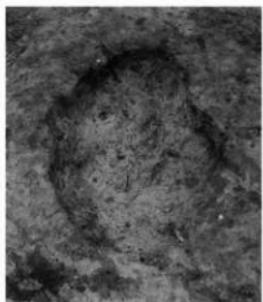


第13号土坑 完掘 E→

写真15 太田(2)遺跡遠景・土坑(1)



第11号土坑 N→



第12号土坑 N→



第1号溝状土坑 S→



第3号溝状土坑 S→



第2号溝状土坑 S→



第4号溝状土坑 S→



第1号溝跡 W→



第1号ピット群 S→

写真16 太田(2)遺跡土坑(2)・溝状土坑・溝跡・ピット群

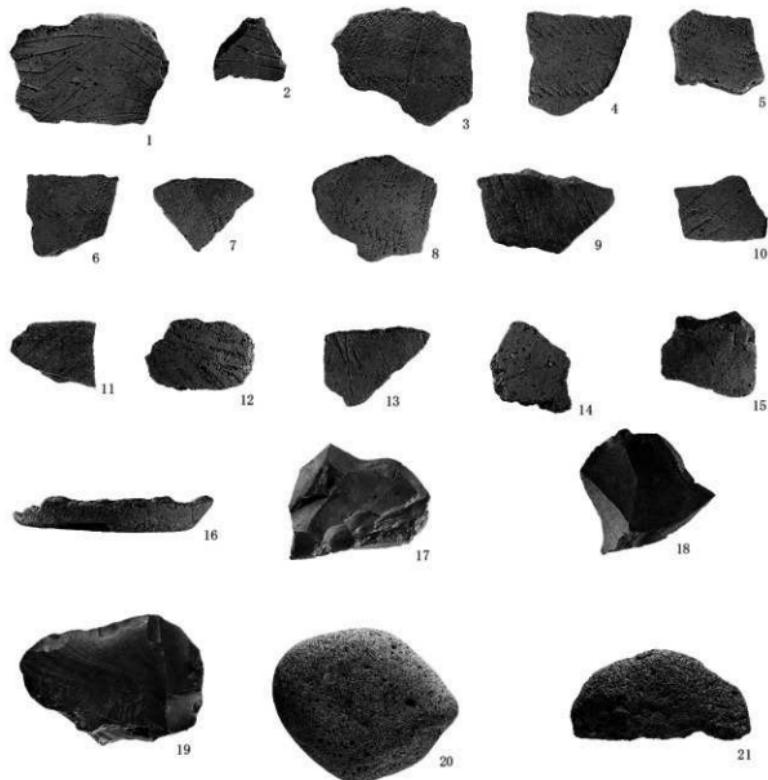


写真17 太田(2)遺跡出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	くらこしかっこにいせきさん おおたかっこにいせき				
書名	倉越(2)遺跡Ⅲ・太田(2)遺跡				
副書名	国道4号七戸バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告				
シリーズ名	青森県埋蔵文化財発掘調査報告書				
シリーズ番号	第464集				
編著者名	成田滋彦・大平哲世・工藤大				
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター				
所在地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字田内152-15 TEL 017-788-5701				
発行機関	青森県教育委員会				
発行年月日	西暦2009年3月6日				

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		日本側地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積	調査原因		
				世界測地系 (JGD 2000)						
		市町村	遺跡番号	北緯	東経					
くらこし かっこに 倉越(2) いせき 遺跡	あおもりけん 青森県 かみさきぐん 上北郡 しづかのまち 七戸町 あざくらこじ 字倉越外	41064	41064	40°	141°	20070717 ~	1,300m ²	国道4号七 戸バイパス 建設事業に 伴う事前調 査		
				42'	09'					
				11"	46"					
		02402	41089	40°	141°	20070928 ~	2,800m ²			
				42'	09'					
				01"	59"					
おおた かっこに 太田(2) いせき 遺跡	あおもりけん 青森県 かみさきぐん 上北郡 しづかのまち 七戸町 あざくらこじ 字太田外	02402	41089	40°	141°	20070829 ~	2,800m ²			
				41'	10'					
				12"	11"					
				40°	141°	20071012				
所収遺跡名		種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項			
倉越(2)遺跡		散布地 集落跡 狩猟場	奈良時代 平安時代 時期不明	竪穴住居跡4軒、溝跡1条、土坑19基 溝状土坑1基		土師器 土師器・須恵器				
太田(2)遺跡		狩猟場	時期不明	溝状土坑4基、溝跡1条 土坑10基、ピット群1		弥生時代土器・石器				

倉越(2)遺跡は、七戸市街より北東方向約1kmで、七戸川左岸の標高約40mの丘陵上に位置している。平成15・16年度に調査を実施し、奈良・平安時代の集落跡であることが確認されていた。今回が最終調査の第3次調査にあたる。今回の調査では奈良・平安時代の土器を検出している。また、竪穴住居跡及び土坑の構築年代は平安時代と考えられるので、奈良・平安時代の集落跡である。

太田(2)遺跡は、大林川右岸と川去川左岸に位置し、沢筋と台地が連なる台地の上にある。今回の調査では、弥生時代の土器と溝状土坑などを検出しておらず、狩猟場的な性格を持つ遺跡と考えられる。

青森県埋蔵文化財調査報告書 第464集

倉越(2)遺跡III・太田(2)遺跡

－国道4号七戸バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日 2009年3月6日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印 刷 高金印刷株式会社

〒038-0015 青森市千刈二丁目1-30

TEL 017-781-2244 FAX 017-781-2509
